

『 戦国散華 真田幸村

～十勇士外伝～』

脚本・演出

美咲 蘭

監修

小松芳郎

作曲

角田忠雄

殺陣

上野隆三

場面設定

プロローグ わらべうた

第一景 十勇士見参

第二景 真田の里のたたら場

第三景 人質 越後と大阪

第四景 別れ 下野犬伏にて

第五景 沼田城の小松姫

第六景 上田合戦

第七景 流人・九度山村の日々

第八景 大坂城出丸造営

第九景 大坂冬の陣

第十景 大坂夏の陣

第十一景 戦国散華

フィナーレ わらべうた

「戦国散華 真田幸村 ～十勇士外伝～」

				凡例: ↓ ↑ …吊りもの上下 装置→…出す 装置←…片付け
				オープニング わらべうた
	MにF・I		M①	「信濃の国」のM流れ、やがて途中から
				「わらべうた」に変わる。
	子ら F・I		子どもら	(客席で歌う)
			M②	花のような秀頼さまを 鬼の様な真田が連れて
				退きも退いたり 鹿児島へ 退きも退いたり 鹿児島へ
	F・O		M③	物々しくミステリアスな音楽に変わり…BGM。
縦帳↑	フォグマシン			(白霧が観客席に流れてくる。)
				第一景 十勇士見参
	客席 F・I			(同時に観客席から舞台に向かって歩いたり、駆けたりする
	中央 F・I			10人の男女が…上の衣をさっと剥ぎ取ると…)
			根津甚八	(根津甚八の姿となる)
			笥十蔵	(火縄銃を手に笥十蔵の姿となる)
			由利鎌之助	(鎖鎌を操りながら由利鎌之助の姿となる)
			望月六郎	(望月六郎の姿となる)
			海野六郎	(海野六郎の姿となる)
			穴山小助	(穴山小助の姿となる)
			猿飛佐助	(天空から下がった藤づるで現れる)
				鎌之助、そんなんで驚いてるようじゃあ、まだ、お頭の
				子分にやあなれねえよ。
			由利鎌之助	佐助、何を生意気なことを言ってやがる。

			三好 清海	それにしても深い霧だなあ。
			三好 伊佐	全くだ。五里霧中とはこのことだ。
			霧隠 才蔵	伊賀忍者の頭領・百地三太夫の弟子、霧隠才蔵の忍法が
				少しは役に立ったかな？
			真田 信繁	才蔵、そちの霧のお蔭で、無事に全員が揃うことができたな。
			全員	お頭、殿、真田信繁様。(などと口々に)
				(夫々の場所に陣取り、時代背景の説明)
				M F・O
		文字	望月 六郎	時は(永禄3年1560年)、今をさかのぼること450年前、駿府の
				今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に滅ぼされると、
			由利 鎌之助	武田信玄が早速駿河攻略を目指し、一方で徳川家康が
				三河・遠近江に勢力拡大を図っていた。
			箕 十蔵	しかも小田原には北条氏康が陣取り、越後の上杉謙信も
				信濃・上野・武蔵・駿河・越中・飛騨へと進出していた。
			女達	(行商 風の女達が巷で流行っている唄をわらべ唄風に歌い踊る)
			合唱 M③	(唄)た一けた武田、そーして上杉
				武田と上杉天下一 なーにがーか あてて見や
				大将の采配、戦の強さ、日本一 の つわものじゃーいな
			海野 六郎	時を経てその15年後、(天正3年1575年)
				織田・徳川連合軍が長篠の戦いで、武田勢に圧勝。
			根津 甚八	信長はその4年後、安土城に移り住み、天下統一に
				乗り出そうとしていた。ほーら、あれが信長公。
			織田 信長	人間五十年、下天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり。
				ひとたび生を得て滅せぬもののあるべきか
			真田 信繁	文字通り群雄割拠、風雲急を告げる戦国時代。
			猿飛 佐助	この物語の主人公、真田信繁、後の日の真田幸村様が
				お生まれになったのは、その頃(永禄10年1567年)のこと。

				ちち たけだ しんげん つか ごうし まさゆき さま 父は、武田信玄に仕える郷士・昌幸様。
			昌幸 幸・繁	のぶなが か あらわ (信長に代わって現れる)
			望・穴	それでは、 ^{との} 殿、 ^{じくう} 時空を超えて
			海・清海	かいじょう みなさま せんごく よ 会場の皆様を、戦国の世に
			管・	ご案内仕ります。ナビゲーターは、
			全員	われ きなだじゅうゆうし 我ら、真田十勇士。
			猿・霧・柵	まずは、 ^{しんしゅう きなだ} 信州真田の ^{さと} 里からスタートです。
上手 F・I			昌幸	(ハイライトでクローズアップする。そこから ^{ひかり ひろ} 光が広がると…)
			第二景 真田の里のたたら場	
前・中央			M④	かたな てつぽう う かじ ふうけい うた こ あそび ゆうけい 刀や鉄砲を打つ鍛冶の風景の歌～子らの遊び～夕景
合唱・舞踊			合唱 舞踊	う 打てや う 打て 打て この ^{てつ ひび} 鉄の響き
				ズシンと ^{はら} 腹にこたえるぜ
				ここは ^{きなだ} 真田の ^ば たたら場さ ソレ
				まつ き き かまど も 松の木を切り 竈に燃やし
				てつ と つく のは かたな てつぽう かま くわ 鉄を溶かして 作るのは 刀に鉄砲 鎌に鉄
				りっぱ どうぐ 立派な道具ができるまで
				う 打てや う 打て 打て この ^{てつ ひび} 鉄の響き
				ヨイサ ヨイヤサ あたしら ^{さてつ ひろ} 砂鉄を拾うのさ
				ふいごで ^{かぜ お} 風を起こすのさ
				ここは ^{きなだ} 真田の ^ば たたら場さ ソレ
唄踊 F・O				
			鍛冶師 たち	(ざるを持ち、 ^{も みず なが} 水の流 ^{さてつ ひろ} れで砂鉄を拾 ^{あら} い洗 ^{おんなたち} う女達、
				おお 大きな ^{いた ふ} たたら板を踏 ^{おとたち} む男達、
				かまどに ^ひ 火をもやし、 ^{たきぎ} 薪をくべる ^{もの} 者、 ^{かじば} 鍛冶場 ^{てつ う} で鉄を打ち
				せいてつ かたな てつぽう せいさん ひとひと こうけい ぐんぶ 製鉄し、刀や鉄砲を生 ^{ひとひと} 産する人々の ^{こうけい} 光景が ^{ぐんぶ} 群舞の
				ように ^ゆ 揺らめきながら ^{つづ} 続く)
			昌幸	(^{みまわ} 見回りながら、 ^{ひとひと} 人々をねぎらい、 ^{こゑ} 声をかける)

			子ら	(^{はし} 走ってくる)
			弁丸	(^{さい} 8歳)御父上 ^{おちちうえ} 一、御父上 ^{おちちうえ} 一。(父にまわりつく)
			源三郎	(^{さい} 9歳)待て一、弁丸、そこは危ないぞ一。
			M	F・O
			母・山の手殿	あらあら、弁丸も源三郎も、この鍛冶場 ^{かじば} に入 ^{はい} っては
				ならぬと、御父上 ^{おちちうえ} から止 ^と められておりましたよ。
				さあさあ、皆様方 ^{みなさま} 、お小昼 ^{こひる} をた一んと持 ^も たせました。
				限 ^{きり} の良 ^よ いところで一休 ^{ひとやす} みなさってくださいまし。
			昌幸	刀 ^{かたな} は、槍 ^{やり} は、鉄砲 ^{てっぽう} は成程 ^{なるほど} 、数 ^{かず} も大分 ^{だいぶん} 揃 ^{そろ} って参 ^{まい} りましたな。
				皆 ^{みな} の衆 ^{しゅう} 、大儀 ^{たいぎ} でござった。一服 ^{いっぷく} なされよ。
			水樹	弁丸様 ^{べんまるさま} 、さあ、外 ^{そと} で遊 ^{あそ} びましょう。
			葦菜	良 ^よ いですか、そ一ら、こうして輪 ^わ になっ ^な って、三 ^{みつ} つ数 ^{かず} えて。
			紅葉	いやだ、あたいが負 ^ま けて、鬼 ^{おに} さんだ。うえ一ん。
			弁丸	よ一し、それなら、わしが変 ^か わってやろう、紅葉 ^{もみぢ} 、泣 ^な かずとも
				よいぞ。鬼 ^{おに} はわしだわしだ。鬼 ^{おに} だぞう。
				水樹 ^{みずき} に葦菜 ^{あしな} も、そ一ら早 ^{はや} く逃 ^に げろよ。
			源三郎	弁丸 ^{べんまる} はやさしいなあ。兄 ^{あに} のわしも、弁丸 ^{べんまる} の氣遣 ^{きづか} いの前 ^{まえ} では
				形 ^{かたな} 無しじや。もつとも、里 ^{さと} の者 ^{もの} がこのたたら場 ^ば を見 ^み たら
				鬼 ^{おに} の集 ^{しゅう} 団 ^{だん} と思 ^{おも} うであらうな。もろ肌 ^{はだ} 脱 ^ぬ いで禪 ^{ぜん} しめて。
				三 ^{みつ} 日 ^{にち} 三 ^{さん} 晩 ^{ばん} 、火 ^ひ を赤 ^{あか} 々と焚 ^た き続 ^{つづ} けているのだからな。
			母・山の手殿	源三郎 ^{げんざぶろう} も、弁丸 ^{べんまる} も、この母 ^{はは} にとつては鬼 ^{おに} などではありませぬ。
				お父上 ^{ちちうえ} もさぞかし、其 ^{そなた} 方 ^{かた} らを愛 ^{いと} しく思 ^{おも} われておいででしょう。
				お父上 ^{ちちうえ} のように、郷 ^{さと} の人 ^{ひと} 々 ^{びと} を大 ^{たい} 切 ^{せつ} にして、皆 ^{みな} 様 ^{さま} のお働 ^{はたら} きを
				よ一く心 ^{こころ} に刻 ^{きざ} んでおくのですよ。大 ^{たい} 将 ^{しょう} と云 ^い う者 ^{もの} は、
				家 ^{かしん} 臣 ^{しん} やそれを支 ^{ささ} える背 ^{はい} 後 ^ご のご家 ^{かぞく} 族 ^{ぞく} あつてこそ。
				ましてや主 ^{しゅじゅう} 従 ^{じゅう} の縁 ^{えにし} は三 ^{さん} 世 ^ぜ と申 ^{もう} しますからね。
			弁丸	主 ^{しゅじゅう} 従 ^{じゅう} は三 ^{さん} 世 ^ぜ …母 ^{はは} 上 ^{うえ} 、それはどうい ^い うことですか。

			源三郎	わたしにも教 <small>おし</small> えて下 <small>くだ</small> さい、母上 <small>ははうえ</small> 。皆 <small>みな</small> もおいで。(と娘 <small>むすめ</small> らに)
			母・山の手殿	おやこ ぎょうだい い 親子兄弟 <small>かみさま</small> と言うものは神様 <small>ほとけさま</small> 、仏様 <small>あわ</small> の憐れみでご縁 <small>えん</small> を頂 <small>いただ</small> く者、
				その肉親 <small>にくしん</small> の血 <small>ち</small> の濃 <small>こ</small> さよりも、主従 <small>しゅじゆう</small> の間柄 <small>あいだ</small> は前世 <small>ぜんせい</small> からこの世 <small>よ</small> 、
				そして来世 <small>らいせい</small> へと三代 <small>さんだい</small> までも続 <small>つづ</small> くそうです。他人 <small>たにん</small> であれば
				ある程 <small>ほど</small> 、お互 <small>たが</small> いがお互 <small>たが</small> いを大切 <small>たいせつ</small> に思 <small>おも</small> いやり、労わり合 <small>いた</small> うこと
				こそ、何 <small>なに</small> より尊 <small>とと</small> いのです。
			昌幸	それはきっと、武家 <small>ぶげ</small> の主 <small>あるじ</small> と家来 <small>けらい</small> の結び付き <small>むす</small> を強 <small>つよ</small> めるために
				上 <small>うえ</small> の立場 <small>たちば</small> の者 <small>もの</small> に都合 <small>つごう</small> よく作 <small>つく</small> られた教 <small>おし</small> えなのかもしれぬがな。
			里人	(用事 <small>ようじ</small> で再び <small>ふたたび</small> 、昌幸 <small>まさゆき</small> を呼 <small>よ</small> びに)
			母・山の手殿	けれど、ご家来方 <small>けらいがた</small> には、主 <small>あるじ</small> の心根 <small>こころね</small> の卑 <small>いや</small> しさ・気高 <small>けだか</small> さを、
				隅々 <small>すみずみ</small> まで見抜 <small>みぬ</small> かれてしまうものなのですよ。
				ご家来衆 <small>けらいしゆう</small> もみな、人 <small>ひと</small> の子 <small>こ</small> の親 <small>おや</small> 、家族 <small>かぞく</small> がいて、暮ら <small>く</small> しがあって、
			源三郎	せんらん な よ なか しあわ く おも 戦乱 <small>せんらん</small> の無 <small>な</small> い世 <small>よ</small> の中 <small>なか</small> で幸 <small>しあわ</small> せに暮ら <small>く</small> したいと思 <small>おも</small> うは
				誰 <small>だれ</small> しも当然 <small>とうぜん</small> のこと。
			母・山の手殿	そうですよ、源三郎 <small>げんざぶろう</small> 。そなたらの生 <small>い</small> き方 <small>かた</small> 働 <small>はたら</small> き方は
				神仏 <small>かみほとけ</small> がいつも見 <small>み</small> ておいでなさる。いえ、そればかりではない、
				後 <small>のち</small> の世 <small>よ</small> 迄 <small>まで</small> もの語 <small>かた</small> り草 <small>ぐさ</small> にされる立 <small>たち</small> 場 <small>ば</small> であることをよく、
				心 <small>こころ</small> にとどめ置 <small>お</small> くのですよ。
			源三郎 弁丸	はい、母上 <small>ははうえ</small> 。(母 <small>はは</small> は再び <small>ふたたび</small> 鍛冶 <small>かじ</small> 小屋 <small>ごや</small> の方 <small>ほう</small> へ…)
たたら場←			M⑤	はい 入りB・G
			子ら	(ひとしきり遊 <small>あそ</small> ぶ)
	下手 F・I		三好 清海	たけだ しんげん こう しんしゆう しもいな よ さ 武田信玄公 <small>たけだ しんげん こう</small> が信州下伊那 <small>しんしゆう しもいな</small> で世 <small>よ</small> を去 <small>さ</small> ったのは、信繁 <small>のぶしげ</small> 様 <small>さま</small> 、
				幼名 <small>ようみょう</small> ・弁丸 <small>べんまる</small> 様 <small>さま</small> が6歳 <small>さい</small> の時 <small>とき</small> だったなあ。
		タブ ロー	三好 伊佐	とうじ きなだ け どうしゆ のぶしげ きま そふ ゆきたか どの 当時真田家 <small>とうじ きなだ け</small> の当主 <small>どうしゆ</small> で、信繁 <small>のぶしげ</small> 様の祖父 <small>きま そふ</small> にあたる幸隆 <small>ゆきたか</small> 殿 <small>どの</small> も、
		信綱 寺		あと おう ように な ちやくなん のぶつな きま あと つ 後 <small>あと</small> を追 <small>お</small> うように亡 <small>な</small> くなり、嫡男 <small>ちやくなん</small> の信綱 <small>のぶつな</small> 様が後 <small>あと</small> を継 <small>つ</small> いだ。
			霧隠 才蔵	しかし、織田 <small>おだ</small> ・徳川 <small>とくがわ</small> 連合軍 <small>れんごうぐん</small> による長篠 <small>ながしの</small> の戦 <small>たたか</small> いで、
			文字	その信綱 <small>のぶつな</small> 様 <small>さま</small> と次男 <small>じなん</small> ・昌輝 <small>まさてる</small> 様が共 <small>とも</small> に、戦死 <small>せんし</small> するに及 <small>およ</small> び、

				お父上、昌幸様は甲州から信州に里帰りされ、
				真田家を継ぐこととなった
		穴山小助		長篠の合戦に敗北した武田勝頼公は、自害。
				龍とも虎とも呼ばれ、信濃一帯を震え上がらせた
				武田一族はあつけなく滅び去ってしまったのである。
		海野六郎		俺たちの大将、真田信繁様は、そんな甲州、甲斐の国に
	下手F・0			生まれ、信州真田で少年時代を過ごされたのじゃ。
	上手F・I	子ら		(裏山へ上る)
	夕景	源三郎		おお、美しい夕日だ。雲の合間に輝いておる。
		弁丸		西山から夕陽が射すと、東の山は真っ赤に染まるのですね兄上。
		少女たち		紅葉も真っ赤でございます。
		弁丸		燃えるような赤い紅葉、霜が来ればすぐにも散り行くというのに
				今を盛りと、すべての木も枝も精一杯、生きておるのだなあ。
		源三郎		この裏山から見下ろす真田の里、わしの一番好きな景色じゃ。
				弁丸、日が暮れる。
				父上、母上が心配なさる。帰るとしよう。(高台を下りる)
				第三景 人質・越後と大坂
				M F・O
屏風→	中央F・I	直江兼続		ほう、そなたが真田昌幸殿のご子息、信繁殿か。
		真田信繁		はっ、初めてお目に掛かります。徳川家康殿を見限った我が父、
				真田昌幸は新たに上杉景勝殿と同盟を結ぶ証の人質として、
				この越後春日山城に私を。本日只今より世話になり申します。
		直江兼続		まあ、よいよい。堅苦しい挨拶は抜きにして、お寛ぎなされよ。
		お布由		ささ、どうぞこちらへお進みくださいませ。
				栗飴に笹団子、深ざめの煮凝りも、このあたりの名物で
				ございましてね。美味しゅうございますよ。
		直江兼続		わしは上杉家家老の直江兼続にごさる。

			お船	つま 妻、お船にございます。
			直江 兼統	のぶしげどの ただいま 信繁殿は只今よりこの上杉家の大切な客人。よって、
				そなたが支配なさる領土は、一千貫と定めよう。
			真田 信繁	はっ、いま なん おお は、今、何と仰せられましたか。私は人質故に
				ちぎょう いっせんかん 知行一千貫とは滅相も…。
			直江 兼統	わ うえすぎせ せんたい との うえすぎ けんしんどの なに 我が上杉家先代の殿、上杉謙信殿は、何よりも
				ぎ おも 義を重んずるお方であった。
				ひとたび どうめい むす うえ 一度同盟を結んだ上は、どのような相手方に対しても
				ぜんぶく しんらい お 全幅の信頼を置いておられたものよ。
				よって、われもそなたを人質とは思わず、客人として
				もてなすは道理。
			お船	たとえふりえき こうむ うらぎ あ たとえ不利益を被ろうと、裏切りに会おうとも、
				まっすぐに前を向き信義を貫くこと。
				それこそが人として守るべき正しい道。
				そうございましょう、信繁殿。
				せんたい との わか ひ 先代の殿も若き日には、家臣の謀反に苦労されたそうです。
				けれど、いかなる時も義の道を守り通すことで家中をまとめ、
				しんらい い ふと 信頼と言う太いきずなを作り上げた聞き及びます。
				おお、これはご無礼致しました。つい、口を差し挟んで…
			直江 兼統	せん わたし おさなしみ お船は、私の幼馴染でな、ついでに申すと、3つ年上。
				しょうがい そくしつ も やくそく めおと 生涯、側室は持たぬと約束して夫婦になり申した。
			お船	はい、やくそく いま まも くだ はい、約束は今もしかと守って下さっておいでです。
			お布由	ふたり お二人ともそれはそれは仲睦まじく遊ばされてね。
				つか わたし なに しあわ お仕える私どもには、それが何より幸せなことでございます。
				あき めぎ 朝目覚めますと、ああ、今日もこのお屋敷でお役に立てられる
				のだと、ひび よろこ のだと、日々喜びをかみしめておりますよ。
			直江 兼統	めさき りえき まど 目先の利益に惑わされず、大義に生きること。すれば、

				何時如何なる時も、そなたのために人が動いてくれよう。
				それでこそ、強く、雄々しく生きられるというもの。
			お船	ほんに。身近なものにこそ、人の心の奥にある、
				人の真実と言うものは、心底見抜かれてしまいますものね。
			お布由	いえいえ、左様なことは…
			三人	(笑う)
			真田信繁	義に生きる…
屏風←				おおや 公けの志を持つこと…
屏風→			M⑥	ブリッジ(音楽の間に次の登場人物と入れ替わる。)
	中央 F・I		映像 文字	いちねん 一年後 大坂城
			豊臣秀吉	真田信繁殿、よう参られた。面を上げるがよい。
			真田信繁	(面を上げる)
			石田三成	御館様、豊臣秀吉公である。
			豊臣秀吉	この豊臣の人質としてよう参られた。だが窮屈に閉じこもる
				でない、障子をあけて見られよ、外は広いでう。
			石田三成	真田一族を殿はことのほか大事に思われてな、
			大谷吉嗣	おお、こちらは太閤殿下の五奉行の一人、石田三成殿。
				心清く私利私欲を全く持たぬ御仁でな、
				損得勘定ばかりを考える輩の多い今の世の中で
				まことに奇つな男よ。
			石田三成	そのお言葉はそっくりお返ししましょうぞ、大谷吉嗣殿。
				清廉潔白とはまさに、そこもどのような方言うのであろう。
				いついかなる時も太閤殿下一筋のお方でな、大谷殿は。
				義の通らぬことの多いのが世の常。
				なれどそれは真の世の中ではない。
				そうではないかな、信繁殿。
			真田信繁	はっ。上杉景勝様のご家老、直江兼続殿に続いて

				またしても義 <small>ぎ</small> の志 <small>こころざし</small> に生きる人 <small>ひと</small> 々が、
				この下 <small>げ</small> 剋 <small>く</small> 上 <small>じょう</small> の世 <small>よ</small> の中 <small>なか</small> にいるとは！
		石田 三成		隙 <small>すき</small> あらば太閤 <small>たいこう</small> 殿下 <small>でんか</small> を倒 <small>たお</small> そうと目論 <small>もくろ</small> む家康 <small>いえやす</small> 、片時 <small>かたとき</small> も油断 <small>ゆだん</small>
				ならぬ男よ。
		豊臣 秀吉		油断 <small>ゆだん</small> ならぬと言 <small>い</small> え、
				信繁 <small>のぶしげ</small> 殿 <small>どの</small> 、そこもとの父上 <small>ちちうえ</small> 、真田 <small>まなだ</small> 昌幸 <small>まさゆき</small> と言 <small>い</small> う男 <small>おとこ</small> 、さても
		映像 文字		表裏 <small>ひょうり</small> 比興 <small>ひきょう</small> の者 <small>もの</small> よのう。(表裏比興 <small>ひょうりひきょう</small> の説明 <small>せつめい</small>)
				武田 <small>たけだ</small> 信玄 <small>しんげん</small> 、武田 <small>たけだ</small> 勝頼 <small>かつより</small> 、織田 <small>おだ</small> 信長 <small>のぶなが</small> 、北条 <small>ほうじょう</small> 、徳川 <small>とくがわ</small> 、上杉 <small>うえすぎ</small>
				主家 <small>あるじ</small> を <small>か</small> え、
				このたびは豊臣 <small>とよとみ</small> に仕 <small>つか</small> えてくれるとな。
				いやはや、何 <small>なん</small> とも目 <small>め</small> まぐるしいことよ。はっはっはっ…。
				されど、戦 <small>たたか</small> わずして勝 <small>か</small> つことは最良 <small>さいりょう</small> の道 <small>みち</small> じゃでのう、
				いかに勇気 <small>ゆうき</small> があろうと、人 <small>ひと</small> に恐 <small>おそ</small> れられる者 <small>もの</small> は良 <small>よ</small> い武将 <small>ぶしょう</small> とは
				言 <small>い</small> えぬ。本 <small>ほん</small> 当 <small>とう</small> に優 <small>すぐ</small> れた武将 <small>ぶしょう</small> とは情 <small>なさ</small> けあり、人 <small>ひと</small> に慕 <small>あ</small> われる
				人物 <small>じんぶつ</small> を言 <small>い</small> う。信繁 <small>のぶしげ</small> 殿 <small>どの</small> の面構 <small>つら</small> え、わしは気 <small>き</small> に入 <small>い</small> ったぞ。(去 <small>き</small> る)
		石田 三成		信繁 <small>のぶしげ</small> 殿 <small>どの</small> 、案 <small>あん</small> ずることはない。
				この戦乱 <small>せんらん</small> の世 <small>よ</small> を生き抜 <small>ぬ</small> くためには、家康 <small>いえやす</small> も、太閤 <small>たいこう</small> 殿下 <small>でんか</small> 下 <small>さ</small> えも
				同盟 <small>どうめい</small> の相手 <small>あいて</small> を次々 <small>つぎつぎ</small> に <small>か</small> えてきておる。
		大谷 吉嗣		まして、北条 <small>ほうじょう</small> 、上杉 <small>うえすぎ</small> 、徳川 <small>とくがわ</small> と大勢力 <small>たいせいりき</small> に <small>かこ</small> まれて
				苦勞 <small>くろう</small> して居 <small>お</small> った真田 <small>まなだ</small> 昌幸 <small>まさゆき</small> 殿 <small>どの</small> が、
				仕 <small>あるじ</small> える主 <small>か</small> を <small>か</small> えてきたからと言 <small>い</small> うて、何 <small>なん</small> の咎 <small>とが</small> があろうか。
				殿下 <small>でんか</small> も十分 <small>じゅうぶん</small> に承知 <small>しょうち</small> して居 <small>お</small> る。
		真田 信繁		このような信義 <small>しんぎ</small> に厚 <small>あつ</small> い家来 <small>けらい</small> を <small>したが</small> 従 <small>したが</small> えておるとは、
				秀吉 <small>ひでよし</small> 様 <small>さま</small> と言 <small>い</small> う男 <small>おとこ</small> 、どのような主君 <small>しゅくん</small> なのであろうか…。
		大谷 吉嗣		時 <small>とき</small> に、信繁 <small>のぶしげ</small> 殿 <small>どの</small> 。わしには娘 <small>むすめ</small> がお <small>お</small> つてな、
				近 <small>ちか</small> い将来 <small>しょうらい</small> 、妻 <small>つま</small> に <small>めと</small> 娶 <small>くた</small> って下 <small>くだ</small> さらぬか、お主 <small>ぬし</small> の。
	中央 F・O			わしが申 <small>もう</small> すのも何 <small>なん</small> だが、中々 <small>なかなか</small> の <small>もの</small> し <small>もの</small> っかり者 <small>もの</small> じゃよ。

			M⑦	はい BG入り
				第四景 別れ・下野犬伏にて
	中央 F・I		北政所 ねね	お 御みやあ様、しっかりしてちょーだやあ。 まだまだ、秀頼殿が ^{ひでよりどの} 大きゅうなられるのを ^{たの} 楽しみに 見守られにやならんだがや。 秀吉 「露と落ち 露と消へにし わが身かな 浪速(なにわ)のことは 夢のまた夢」 信長殿の草履取りから身を起こし、天下人、関白、太閤と 呼ばれ、戦国一の出世頭と謳われた、このわしも愈々 年貢の納め時かのう。思えば、刀狩、検地、朝鮮出兵 国を治めるために考え付く限りの働きをなしたつもりじゃが、
			M	F・O
			北政所 ねね	わっちも、織田信長様のお薦めで、殿の下に嫁いできて 子どもこそできませんんやけど、仲良う今日まで 暮らせて、どえりやあ幸せやったんや。 わっちが十四歳、おみやあ様は二十五歳、鷹狩の帰りに 立ち寄りなさったんが馴初めやったなあ。 あれから四十年、昨日のここのように思い出されますよ。
			淀殿	(側室となって10年目、秀頼5歳を連れ)
			秀吉	いえやすどの まえだ としいえどの もり てるとどの うえすぎ かげかつどの 宇喜多秀家殿…、大老職の五人衆よ、 返す返す秀頼のこと 頼み申し候 返す返す秀頼のこと 頼み申し候
			北政 所 ね ね	まえさま よどどの ひでよきさま お前様、淀殿と秀頼様がおいでなさいましたよ。
			淀殿	たいこうさま ひでより どの ちちうえ 太閤様、さ、秀頼殿、お父上に。
			秀頼	ちちうえ ちちうえ ひでより お父上、お父上、秀頼でございます。ねえ、御目を開けて 下され。

中央 F・O		秀吉	おお、 ^{ひでより ははさま} 秀頼、 ^い 母様の言うことをよく聞いて、 ^{おお じょうぶ} 大きく丈夫に、な。
		M⑧	ブリッジ
	映像 文字		^{けいちよう ねん} 慶長 3年(1598年) ^{ねん とよとみ ひでよし きょうと ふしみじょう} 豊臣秀吉は京都伏見城にて死す。 ^{し きょうねん さい} 享年61歳。
下手 F・I		淀殿	^{たいこう ひでよしまま} 太閤秀吉様が、 ^な お亡くなりあそばされ、
			^{いえやすどの うえすぎどの} 家康殿、 ^{ごにん} 上杉殿をはじめとする五人の ^{たいろう} 大老と、
			^{いしだ みつなりどの} 石田三成殿ら五人の ^{ごぎょう} 奉行による ^{ごうぎせい} 合議制の ^{まつりごと} 政が
			^{はじめ} 始まったのでございます。
	北政 所 ね ね	淀殿	^{よど どの} 淀殿、 ^{わたし ひでよりの} しばらくは私も秀頼殿の ^{こうけんにん} 後見人として、
			この ^{しろ} 城にとどまります。なれど、 ^{ひでよりの} 秀頼殿が ^{めでた} 目出度く
			^{よめ ご むか} 嫁御を迎えられた ^{あかつき} 暁には、 ^{わたし} 私は、 ^{たいこうさま} 太閤様と ^{おお まんどころ さま} 大政所様の
			^{ぼだい とむら} 菩提を ^{よせい} 吊って ^す 余生を ^{こと} 過ごす ^{いた} 事と致しましょう。
	淀殿		^{きたのまんどころ さま} 北政所様、 ^{ありがた} 有難き ^{しあわ} 幸せに ^{ぞん} 存じます。(^{きたのまんどころ} 北政所を見送る)
			うつつ、この ^{にお} 匂い、 ^{だれ} 誰じゃ、 ^{そこ} そこにおるのは。
	霧隠 才蔵		はっ、 ^{きり がく} 霧隠れ ^{さい ぞう} 才蔵にございます。
		淀殿	^{さい ぞう} 才蔵、 ^い 生きておったのか。
	霧隠 才蔵		^{よど} 淀の方様に ^{かたさま} 置かれましては、 ^お 太閤様 ^{たいこうさま} お隠れあそばし、
			^{しんちゆう} 心中いかにばかりかと…。
			^{ちちぎみ あさい} お父君、 ^{ながまさ こう} 浅井長政公が ^{おだ のぶなが} 織田信長に ^{ほろ} 滅ぼされました ^{おり} 折、
			^{わたし} 私は、 ^{いが} 伊賀の ^{さと} 里に ^お 落ち ^{いが りゆう} 延び、伊賀流 ^{にんじゆつ} きつての忍術の ^{たつじん} 達人
			^{もも ち} 百地 ^{さんだゆうどの} 三太夫殿に ^{にんじゆつ} 忍術を ^{まな} 学びました。 ^な 亡き ^{あさい} 浅井の ^{どの} 殿の
			^{おん むく} ご恩に ^{なん} 報いるため、 ^{なん} 何なりと ^{やく} お役に ^{たち} 立ちとうございます。
		淀殿	そうでしたか。
			わらわは、 ^{ひでよし} 秀吉様が ^{さま} お心を ^{ころ} 許した ^{ゆる} 無二の ^{むに} 友、 ^{とも} 前田 ^{まただ} 利家 ^{といえ} 殿が
			^な 亡くなられて ^{のち} 後、 ^{くる} 苦しみばかりの ^{ひび} 日々じゃった。
			^{おおさかじょう} 大坂城に入った ^{はい} 家康は、 ^{いえやす} 秀頼の ^{ひでより} 後見人 ^{こうけんにん} となつて ^{じつけん} 実権を ^{にぎ} 握り、
			^{ごたいろう} 五大老・ ^{ごぎょう} 五奉行の ^{ごうぎせい} 合議制は ^{ゆうめいむじつ} 有名無実となつてしまった。
			^{いま} 今は ^{いしだ} 石田 ^{みつなりどの} 三成殿の ^{ちから} お力に ^{ちから} すぎるより ^{ちから} ほかはないのです。

			石田 三成	いえやす てはし 家康は、手始めに、
				うえすぎ かげかつ どうぼつ 上杉景勝を討伐するために
				あいず む 会津に向かった。
				とよとみ け ごぎょう ひつとう いしだ みつなり 豊臣家五奉行の筆頭、それがし、石田三成は
				だとう とくがわ はたじろし きよへい いた しだい 打倒徳川を旗印に拳兵致した次第。
屏風←				このしじょう すみ さなだどの とど くだ この書状を速やかに、真田殿へ届けて下され。
	前面 F・I		霧隠 才蔵	しじょう つかまつ はっ承知仕りました。
			望月 六郎	いえやす ぐんげい ごうりゆう うつのみや む ぐん すず 家康の軍勢に合流しようと宇都宮に向かって軍を進める
				われ たいしやう さなだ まさゆき さま のぶしげ さま おやこ 我らが大将、真田昌幸様、信繁様親子は、
		文字		しもつけ いぬぶし とちぎけん さの やど 下野の犬伏(栃木県佐野)に宿をとっておられたが、その夜、
				ふたり もと とよとみ がた さんぼう いしだ みつなり しじょう とど 二人の下へ、豊臣方の参謀・石田三成からの書状が届いた。
			霧隠 才蔵	おう、もちつき るくろ おう、望月六郎。
			望月 六郎	よしきた。はな こそう むかし のぶしげ さま かげむしや よきました。鼻たらし小僧の昔から、信繁様の影武者として
				つか お仕えてきたこの俺だ。みなまで言うな。わかっておる。
			霧隠 才蔵	まだなに い ないぞ。あいか き はや まだ何も言っていないぞ。相変わらず気が早いなあ。その
				あわ おおつづ じらい つく そこ だぶつ 慌てっぷりで大筒や地雷を作り損ねてズドン、お陀仏は
				ま びら なに ばくだん かやく めし かた かか 真っ平だぜ。何しろ爆弾・火薬はお主の肩に掛っているからなあ。
			望月 六郎	なあに、じまん おれ おやじ まさゆきさま かしん なあに、自慢じゃねえが俺の親父が昌幸様の家臣でな、
			霧隠 才蔵	じまん 自慢してるぞ。
			望月 六郎	おれ のぶしげ さま つか ばたら いさば ゆうめい 俺は信繁様にお仕えてひとつ働き戦場であの有名な
				しげのけ もちづきけ な あ 滋野家ゆかりの、望月家の名を上げるまでは、
				し のぶしげ さま あにうえ のぶゆき さま 死ねないねえ。おっと、信繁様の兄上、信之様も
			霧隠 才蔵	こうずけ めまたじょう か 上野の沼田城から、駆けつけられたようだな。では、
				しじょう ちちうえ まさゆき さま わた この書状をしかとお父上、昌幸様にお渡ししてくれよ。
篝火→	篝火		M⑨	ブリッジ
	中央 F・I	火の燃 える音	真田 信幸	ふたり すわ のぶゆき か こ (二人が座っているところへ、信幸が駆け込んでくる)
				ちちうえ みつなりどの きよへい 父上、三成殿が拳兵されたとは、まことでござりまするか。

			真田 昌幸	うむ、全国の有力大名に戦に加わるよう呼びかけておる。
				今夜この場で、我が真田一門の行く末を決めねばならぬ。
				(密書を読む)
				このたび、太閤秀吉様の遺言に背き、御子秀頼様を見捨て
				兵を進めた家康を(主家に仇なす罪人と…)
			石田 三成	(高台に石田三成浮かび上がり文を読む声が重なる)
				御子秀頼様を見捨て兵を進めたる徳川家康を、主家に仇なす
				罪人と認めるものなり。よって、太閤殿下への恩義を忘れぬ
				同志あらば、我らと共に秀頼様への忠節をお誓いすべく
				家康討伐に加わり候へ。
			真田 昌幸	秀頼様への忠節を(手紙から離れ)誓うようにと促して居る。
			真田 信幸	すなわち石田三成様は、我が真田家に、
				東軍の家康様を離れ、西軍の秀頼様に味方せよとの
				仰せにござりまするな。ならば父上のお考えを是非とも。
			真田 昌幸	わしは、徳川を離れ、西軍につく。今日までを顧みれば、
				太閤殿下あってこそその真田じゃからのう。それに、
				家康と言う男、どうも信用がならぬでな。秀頼殿を仰ぐ
				三成方が勝利すれば、真田の領土は信濃一帯に広がるで
				あろう。これこそ、真田家躍進の最後の機会と見た。
				だが、信幸、そなたは徳川に残るが良い。
			真田 信繁	しかし父上。それでは我らは敵味方に。私は合点が行きませぬ。
				成程、兄上の奥方は徳川四天王の一人、本田忠勝殿の娘御、
				小松姫。然も家康の養女となってから兄上の下に嫁がれた方。
				兄者は…。
			真田 信幸	わしは、徳川に残る。いや、妻が徳川の身内だからと言うだけ
				ではない。父上から学んできた、それが真田の生き残る
				道だからじゃ。

			真田 信繁	あに じゃ あにじゃ たたか わたし には できぬ。 仮に この 場 で 即刻
				ほろ 滅び よう と も、 人 と し て の 道 を 貫 く こ と が 真田 一 族 に と つ て は
				なに 何 より 大 切 で は ご ざ ら ぬ か。 ま し て 我 ら が 母 上 は、 三 成 殿 の
				おくがた 奥 方 と は 血 を 分 け た 姉 妹。
				かずかず 数 々 の 恩 義 を 顧 る な ら ば、
				とくがわ 徳 川 より も 豊 臣 の 方 が は る か に 優 つ て …。
			真田 信幸	のぶしげ 信 繁、 戦 に 負 け て 跡 形 も な く 滅 び ゆ く こ と が い か に 無 念 な
				ことか … わ し は、 あ の、 日 の 出 の 勢 い を 誇 っ た 武 田 方 の 滅 亡 の
				さま 様 を 子 ど も 心 に し か と 刻 ん で 育 っ た。 そ の 儂 さ 哀 れ さ が 今 も
				わし の 脳 裏 に 焼 き 付 い て 離 れ は せ ぬ の よ。 引 き 換 え、
				やまあい 山 間 の 小 さ な 部 族 に す ぎ ぬ 真 田 が 今 日 ま で 生 き 残 っ て
				こ 来 ら れ た の は、 ひ と え に、 戦 略 に 長 け た 父 上 の 並 外 れ た
				ちえ 知 恵 と 力 に 依 る も の と 心 得 よ。 な れ ば こ そ、 わ し は、
				わ し は、 何 と し て も 真 田 の 家 を 守 り 抜 き た い の じ ゃ。
			真田 信繁	な ら ば、 な お の こ と 秀 頼 様 の 西 軍 に。
			河原 綱家	ご め ん 下 さ れ。 昌 幸 殿、 い か が で ご ざ い ま す か な。
			真田 昌幸	だ れ も 近 寄 っ て は な ら ぬ と、 人 払 い を 命 じ て お っ た に、
				なに よう 何 用 あ っ て こ こ へ 来 た の か。 下 が れ。 (扇 を 投 げ る)
			真田 信繁	あに じゃ い ま い ち ど か ん が 一 度 考 え て 下 さ れ。
			真田 昌幸	のぶしげ 信 繁、 も う よ い。 分 か っ て や れ。
				のぶゆき 信 幸 は 今 日 より、 わ し ら と は 袂 を 分 か っ た。 だ が、 信 幸 は
				そ な た の 兄、 わ し の 子 で あ る こ と に 変 わ り は な い。
				だんぎ 談 義 は こ れ に て 終 わ り じ ゃ。 さ、 も う 行 け。
			真田 信幸	ちちうえ 父 上、 さ ら ば で ご ざ り ま す。 (礼 を し て 立 ち 上 が る)
	風雨		真田 昌幸	からだ 体 を い た わ る の じ ゃ。 妻 や 子 の た め に も な。
			真田 信幸	(室 外 で) 信 繁、 い よ い よ 天 下 分 け 目 の 戦 が 始 ま る。
				ひがし に し わか 東 と 西 に 別 れ よ う と も、 敢 え て 分 の 悪 い 大 坂 方 に 付 か れ た

				ちちうえ おも く たが 父上の思いを組んで、互いに
				く のこ せい いっぱい はたら わら だいち 悔いの残らぬよう、精一杯の働きをしようぞ。(笑う) 第一、
				まえ せいぐん ま わし いえやすどの いのちご お前の西軍が負けたときは、俺が家康殿に命乞いができる
				ではないか。
			真田 信繁	あにうえ 兄上。
			真田 信幸	こ ころ のやま か まわ あそ ひ なつ 子どもの頃、野山を駆け回って遊んだ日が懐かしい。
			真田 信繁	はい はる さくら あき もみじ いま め や っ はい、春は桜、秋は紅葉の…今も目に焼き付いております。
篝火←	中央 F・O		真田 信幸	ちちうえ たの 父上を頼んだぞ。
			M◎	あいしゆう 哀愁ブリッジ
	上手前 F・I		根津 甚八	きなた け ちようなん のぶゆき きま いえやす もと か 真田家長男、信幸様はすぐさま、家康の下に駆けつけ、
				こと てんまつ った しゆうせい 事の顛末を伝えなされた。そして、終生、
				とががわ ちゆうせい つ ちか のぶゆき きま いえやす てあつ ねざら 徳川に忠誠を尽くすと誓う信幸様を、家康は手厚く労い、
				ちち まさゆき しりょう しなの くに ちいさがた ごおり 父・正幸さまの所領であった信濃の国、小県 郡、
				げんざい うえだし ちいさがたぐん のぶゆき あた 現在の市と小県郡を信之さまに与えたという。
				ああ おれ ねづ じんぼち しげの なが ねづけ で ああ、俺は根津甚八。滋野の流れをくむ根津家の出よ。
				かいぞく のぶしげ きま ひろ 海賊になっていたところを信繁様に拾われてな、
				いま かげむしや 今は影武者よ。
			くノ一 狭霧	かしら のぶしげ きま いのち お頭、あたいらもね、信繁様のためなら、この命
				くれてやっても惜しくはないよ。
			くノ一 夕月	いま ほんじん めした おんな み 今はこうして、本陣の飯炊き女に身をやつしていても
				いくさばたら おとこしゆう 戦働きなら、男衆にひけはとらないよ。
			狭霧 夕月	ああ、うで ああ、腕がなるう。
				て みち ゆ かわい お手てつないで、の道を行けば、みんな可愛い
				うさぎになって
			根津 甚八	くつ な それは靴が鳴るでしょ。
				いちばん かし かわい ことり ちなみに一番の歌詞はね、みんな可愛い小鳥になって
				ぴよぴよぴよ…。

				ばつきやろう、何をさせるんでえ、てめえら。
			狭霧 夕月	おに かお すてき 怒った顔もまた素敵、お・か・し・ら〜。(目が♡)
			根津 甚八	ナビゲーターの本業に戻るぜ。
			M	わらべうたイントロ入り、歌と踊り
			狭・夕 甚八	いっほう まさゆき と、 じなん のぶしげ いぬがし うえだじょう へい すず 一方の昌幸と、次男・信繁は、犬伏から上田城へと兵を進めた。
前面 F・I			合唱 舞踊	がっしょうだん とも うた おど こうわかまい ふんそう (合唱団と共に歌い踊る幸若舞の扮装で)
			M⑩	てんか わ め せきがはら まえ 天下分け目の 関ヶ原を前に
				おやこ きょうだい なみだ しぼ にし ひがし わ きなだ 親子兄弟 涙を絞り 西と東に分かれた真田
				ちまた うた はや 巷じゃ歌が流行ったげな こーんな歌が流行ったげな。
				とうざい み ころ わ うえだ じま 東西へ見ごろを分ける上田縞
				りょうほう つえ はしら きなだ わ 両方へ杖と柱を真田分け
				むもん わ 六文を分けていちもんたやさぬ気
			狭・夕 甚八	とちゅう まさゆき さま のぶしげ さま ぐんぜい いま てきがた のぶゆき さま 途中、昌幸様・信繁様の軍勢は、今は敵方となった信之様の
前面 F・O				しろ こうづけ くに めまたじょう たち よ こま すず 城、上野の国、沼田城に立ち寄るべく駒を進められた。
				第五景 沼田城の小松姫
			M	F・O
中央 上高			信繁	たの 頼もう。
			侍女 初音	このやはん なにごと この夜半に、何事でございますか。(侍女萌黄を伴って)
				しか ものもの い た 然も物々しい出で立ちで。
			侍女 萌黄	おんな あなど 女と侮られるようならば、容赦いたしませぬぞ。
			信繁	それがしはきなだ のぶしげ それがしは真田信繁にござる。ただいま、父、昌幸と共に
				こよい いちや やど ねが 今宵一夜の宿りを願いたく…
			侍女 初音	こまつ ひめさま きなだ のぶしげさま なの 小松姫様、真田信繁様と名乗っておられます。
			侍女 萌黄	お父上もご同伴の由…。
			小松 姫	のぶしげどの 信繁殿。なぜここに。
				そなたのあにうえ るす し そなたの兄上が留守と知っての上で…
				ああ、これはこれは、ちちうえ ひさ ぞん ああ、これはこれは、父上。お久しゅう存じます。

				なが たびし つか 長の旅路、さぞお疲れでございましょう。
				ほんらい 本来なれば、すぐにも開門し、兵馬共にお休みいただく
				ところ 所でございますが、
				ぬまたじょう わ おつとのぶゆきどの わたし るす たく この沼田城は、我が夫信幸殿から、私めが留守を託されて
				おります。たとえちちうえ おとうと ぎみ 父上と弟君でありましようとも、
				にし ひがし わ にかれた いま 西と東に分かれた今となりましては、てき どうぜん おふたり 敵も同然。お二人を
				いっぽ じょうない い 一歩たりとも城内にお入れするわけにはまいりませぬ。
				もしどうしてもとおっしゃるのであれば、
				これこの通り、いっせん まじ 一戦交えましても押し留める覚悟にございます。
			真田 昌幸	いや、なに まご かお み た ち ち ち ち いや、何、孫の顔が見たくて立ち寄っただけじゃ。
				みな もの きき へい 皆の者、先へ兵をすゝめよ。
				きりながら) さすがは、とくがわ してんのう ひとり ほんだ ただかつどの (去りながら) さすがは、徳川四天王の一人、本田忠勝殿の
				むすめご こまつ ひめ いえやす ようじよ 娘御、小松姫。家康の養女となってから輿入れしてきた
				だけのことはある。のぶしげ ばら た 信繁、腹を立てるでないぞ。
				それでこそ いっくいちじょう あるじ つま あつば それでこそ一国一城の主の妻。天晴れじゃ。
	上高 F・O			きなだ いえ あんたい 真田の家は、それでこそ安泰じゃ。
			小松 姫	うば とも こ だ か (乳母と共に子を抱いて駆けつける)
			侍女 初音	ちちうえさま さいぜん ぶれい お父上様、最前よりのご無礼、
				はつね いくえ わ もう あ のぶゆきさま この初音、幾重にもお詫び申し上げます。信之様の
				るす あず こまつ ひめさま つら むね うち 留守を預かる小松姫様のお辛い胸の内、
				く と くだ どうぞお汲み取り下さいますよう。
			小松 姫	ちちうえさま ちちうじよ じじよ あかご お父上様、長女のまんと、次女のまさ(赤子)にございまする。
				さま さ、おじい様ですよ。
			まん	おじいさま、おじいさまは何故、お城に来て頂けないのですか。
				ね、ね、はや ゆ けい ね、ね、早く行きましようよう。お母様、ねえ、良いでしょう。
				さ、まんと いっしょに い さ、まんと一緒に行きましよう、おじい様。
			真田 昌幸	おう、おう、めもと くちもと ははぎみ い うつ おう、おう、目元口元、母君に生き写し。

		真田 信繁	きしょう に 気性もよう似ておいでじゃ。はははは…。
		真田 昌幸	おお ころ そなたが大きいなる頃には、戦は終わっていてほしいもの。
			まんよ、そなたの母君は、婿選びの席で、並み居る大名たちの
			まげ かお ひとり ひとり みさだ ごうけつ 髷をつかんで顔を一人一人見定めたほどの豪傑よ。
		真田 信繁	はなし き およ その話、それがしも聞き及んでおります、姉上。
		小松 姫	とき とのがた なか のぶゆきどの ただ ひとり たいそう りつぷく あの時は殿方の中で、信幸殿だけが只一人大層ご立腹
			わたし おうぎ う す あそばされ、私めを扇で打ち据えたのでございます。
		まん	なに つよ とのご かあさま 何をする。キャー、強い殿御。それでお母様は
			とうさま まい お父様にころりと参ってしまわれたのですね。
			なあ、いいだろう、小松姫。
			だめよ、だめだめ。
		小松 姫	ちやうし の こらこら、すぐにお調子に乗るのではありませんよ。
			ほんとう こ だれ に 本当にこの子は誰に似たのでしょうか。
		真田 昌幸	おなご すえたの 女子ながら末頼もしいのう。
		全	わら (笑う)
下高 F・I		M⑫	かつせん おんがく 合戦の音楽F・I
			第六景 上田合戦
		徳川 秀忠	ぐんぱい じんとう しき (軍配をかざし、陣頭指揮をする。)
下前 F・I		三好 伊佐	あに おれ でばん 兄きよー、いよいよ俺らの出番だなあ。
		三好 清海	おとうと いき にゆうどう みよし せいがい にゆうどう ふたり おうさ、弟、伊佐入道よ。このわし、三好青海入道と二人
			りっぱ ナビゲーターってもんを立派にやってやろうじゃねえか。
		三好 伊佐	がってん しょうち すけ 合点、承知の助。ナビゲーターってなんだべ？
		三好 清海	ナビゲーターはナビゲーターよ。つまり、宇宙からの侵略者。
		三好 伊佐	それはインバーダー。
		三好 清海	す アフリカに棲むワニ。
		三好 伊佐	それはアリゲイター。
		三好 清海	みずさき あんないごん ナビゲーターてのはだなあ、つまり水先案内人のことよ。

				<small>さなだ まさゆき さま うえだじょう た のぶしげ さま うえだじょう ひがし</small> 真田昌幸様は上田城に立てこもり、信繁様は上田城の東、
				<small>とし じょう まも</small> 砥石城を守られた。
			三好伊佐	<small>とくがわいえやす とくかいどう にし すず</small> 徳川家康は東海道を西へと進み、
				<small>いえやす さんなん のち とくがわ だいに だいしよくん ひでただ まん せん</small> 家康の三男で、後の徳川第二代将軍、秀忠は3万8千の
				<small>くんぜい ひ つ なかせんどう くだ こもろじょう とうちやく</small> 軍勢を引き連れて中仙道を下り、小諸城へ到着した。
			三好清海	<small>まさゆき ちようなん のぶゆき</small> 昌幸の長男、信幸もこれに加わっていた。
上前 F・I			真田信幸	<small>ひでただ さま たつ うえだじょう かいじよう</small> 秀忠様からのお達しにより、上田城を開城されたし。
			真田昌幸	<small>しろうち つかまつ わ さん ぜん へい おおさか がた くみ き</small> 承知仕った。我が三千の兵は、大坂方に与すると決めた
				<small>わけ ではない さっそく しろ あ わた</small> わけではない。早速にも城を明け渡しましょうぞ。
			真田信幸	<small>ひでたださま うえだじょう ま かいじよう てはず ととの</small> 秀忠様、上田城は間もなく開城の手筈、整ってございます。
				<small>しかし さいぜん なん おと さた いか い いさか</small> しかし、最前より何の音沙汰もない。如何に言っても些か
				<small>おそ</small> 遅うござる。
				<small>うえだじょう そつこく かいじよう</small> 上田城を即刻開城された一し。
			真田昌幸	<small>されど わ さなだ いちもん たいこう でんか おんこ わす ただいま</small> されど我が真田一門は、太閤殿下の恩顧を忘れがたく、只今
				<small>しろう まくら うちじに かくご めいど みやげ</small> より城を枕に討死いたす覚悟でござる。冥途の土産に
				<small>わ さなだ くん さん ぜん う ほろ</small> 我が真田軍三千を打ち滅ぼしていただきたい。
				M F・O
下前 F・I			笥十蔵	<small>あれれ まさゆき さま しろ あ わた さつき やくそく</small> あれれ、昌幸様ったら、城を明け渡すって先の約束どうしたの？
				<small>おれ かけい じゆうぞう おれ かけい はは かけいほ</small> あ、俺、笥十蔵。俺の家計？母は家計簿つけてるけど、
				<small>かけい くる おれ もら</small> 家計は苦しいよ。だからまだ俺、かみさん貰えねえの。
				<small>ワーキングプア いうの えっ その かけい</small> ワーキングプアって言うの。えっ、その家計じゃねえ？。
				<small>わ 分かてるって おれは とよとみ ふだい だいまよう はちすかけ</small> 分かてるって。おれは、豊臣の譜代大名、蜂須賀家の
				<small>かけい さなだ くん さん ぜん かけい じゆうぞう たねがしま いま てっぽう</small> 家系なの。それで、笥十蔵。これでも種子島、今でいう鉄砲
				<small>めいしゆ</small> の名手ってわけ。
			海野六郎	<small>おうおう かけい じゆうぞう なーに あそ</small> おうおう、笥十蔵、何、遊んでやがる。
			笥十蔵	<small>うんの ろくろう どの ろくろうどの じゆう ゆし なか さいこ さん</small> 海野六郎殿。六郎殿は、十勇士の中でも最古参の、
				<small>まあ さんぼう ほんぶ ちよう い みな</small> まあ、参謀本部長、と言ったところです、皆さん。

			海野 六郎	く ^{いち} ノ一の麻由と蚕。機織りが得意でな、桑摘みが早い ^{はや} の何 ^{なん} の。
			麻由 蚕	よろしく。上田 ^{うへだ} 紬 ^{つむぎ} も真田 ^{まんだ} 紐 ^{ひも} も、手早く ^{てばや} 編んで見せましょう。
			海野 六郎	早速 ^{さつそく} ナビゲーション開始 ^{かいし} と行こう。
			寛 十蔵	おっと、そうでした ^{すじだ} そうでした ^{すす} 。筋立てはどこまで進んで
				居ました ^い つけ？
			麻由	上田城 ^{うへだじょう} 明け渡し ^{わた} に乗る ^の ふりをして、持久戦 ^{じきゆうせん} に持ち込み ^も 、
				敵方 ^{てきがた} の徳川 ^{とくがわ} 秀忠 ^{ひでただ} を焦 ^し らせてからかっているところ。
			寛 十蔵	さすがに、前言 ^{ぜんげん} を翻 ^{ひるがえ} して挑発 ^{ちようはつ} するような昌幸 ^{まさゆき} 様のこの言葉 ^{ことば} に、
				侮 ^{あなど} られたと気付 ^{きづ} いた秀忠 ^{ひでただ} 公 ^{こう} は、
				その場 ^ば で真田 ^{まんだ} 攻撃 ^{こうげき} の命令 ^{めいれい} を下 ^{くだ} した。
			海野 六郎	まず初 ^{はじ} めに、信繁 ^{のぶしげ} 様の立 ^た てこもる砥石城 ^{といしじょう} を攻 ^せ めたが、
				既に ^{すで} 城 ^{しろ} を抜 ^ぬ け出し、そこは蛻 ^{もぬけ} の殻 ^{から} 。
				翌日 ^{よくじつ} 、秀忠 ^{ひでただ} は染谷 ^{そめや} 丘 ^{おか} に陣 ^{じん} を張 ^は り、上田城 ^{うへだじょう} を包圍 ^{ほうい} 。すると、
				目 ^め の前 ^{まえ} に昌幸 ^{まさゆき} 様が現 ^{あらわ} れ、
			真田 昌幸	高砂 ^{たかさご} やー この浦舟 ^{うらふね} に帆 ^ほ を挙 ^あ げてー(扇 ^{おうぎ} を手に舞 ^ま う)
			蚕	お追 ^お いかけると、次 ^{つぎ} に、虚空蔵 ^{こくぞう} 山 ^{さん} から信繁 ^{のぶしげ} 様の軍勢 ^{ぐんせい} が現 ^{あらわ} れ、
				鉄砲隊 ^{てっぽうたい} が集中砲火 ^{しゅうちゅうほうか} を浴 ^あ びせるではないか。
			海野 六郎	こうして、真田 ^{まんだ} 勢 ^{ぜい} は得意 ^{とくい} の戦法 ^{せんぽう} で徳川 ^{とくがわ} の大軍 ^{たいぐん} を七日 ^{なな} 間に
				亘 ^{わた} り、翻弄 ^{ほんろう} し足止 ^{あしど} めを食 ^く わせた。これにより、秀忠 ^{ひでただ} は、
				関ヶ原 ^{せきがはら} の決戦 ^{けっせん} に間 ^ま に合 ^あ わず、家康 ^{いえやす} の怒 ^{いか} りを買 ^か うこととなった。
			麻由 蚕	なん ^{なん} ともお気 ^き の毒 ^{どく} なこと。
			寛 十蔵	しかし、真田 ^{まんだ} の奮戦 ^{ふんせん} も甲斐 ^{かい} なく、豊臣 ^{とよとみ} の身内 ^{みうち} であった小早川 ^{こばやかわ}
				秀秋 ^{ひであき} が東軍 ^{とうぐん} の家康 ^{いえやす} 方に寝返 ^{ねがえ} ったことから、
			タブ ロー	蚕 麻由
				初 ^{はじ} めのうち ^{うち} は優勢 ^{ゆうせい} だったか ^か に見 ^み えた石田 ^{いしだ} 三成 ^{みつなり} 率 ^{ひき} いる西軍 ^{せいぐん} は
				大敗 ^{たいはい} し壊滅 ^{かいめつ} した。
				信繁 ^{のぶしげ} 様の奥方 ^{おくがた} の父上 ^{ちちうえ} 、大谷 ^{おおたに} 吉嗣 ^{よしつぐ} 様 ^{さま} は討死 ^{うちじに} 。
				三成 ^{みつなり} 様 ^{さま} は死罪 ^{しざい} 。

			海野 六郎	われ 我が昌幸様・信繁様親子は三成同様、
				しざい もう わた 死罪を申し渡された。
			蚕	な一んと御勞しいこと。
下上 F・O			麻由	いしだ みつなりさま 石田三成様は、すぐさま城を落ち延びて近江に身を隠されたの。
			M㊸	ブリッジ
客席 通路			百姓 与次郎	みつなりさま いしだ きま 三成様、石田様、さ、こっちへ、早うお隠れになっておくれやす。
			石田 三成	そちは何故に、わしを匿うのじゃ。
中央 前面			百姓 与次郎	へえ、みつなりさま へえ、三成様、わしは近江の国古橋村の百姓、与次郎と
				もう 申しやす。覚えてはりますか。先だつて、飢饉で作物が取れなん
				で村の者みんなが、飢えてえろう困ったりしました。そんな時、
				あんさんが、米百石を分け与えなはって、みんなを救って
				くれはりました。
				その御恩はわてら、一生忘れられまへんがな。
			石田 三成	しかし、戦に負けて徳川に追われておるわしを匿えば、
				おやきょうだい むらうち のこ 親兄弟も、村内も残らず打ち首獄門。そうまでして助けられては、
				いかにわしが再び徳川を倒し天下統一を果たそうと思つても
				志が鈍るではないか。
			百姓 与次郎	いいえいえ、みつなりさま 三成様。
				わては、徳川の咎めが他の者に及ばんように
				つま りえん しざい かくご てび 妻を離縁し、死罪覚悟で手引きさせてもろてます。
				そやさかい、なんも心配おへんのどす。
			石田 三成	もう十分、もう十分じゃ。侍の信義が廢れても、百姓の貴殿に
				ひと まこと み 人としての信をしかと見せてもろうた。三成、一生忘れはせぬ。
				さ、もう行け。わしの居所を徳川に知らせるのじゃ。
			百姓 与次郎	なに 何をおっしゃいます。
			石田 三成	ゆ 行かぬとわしがこの場で高声上げようぞ。
			百姓 与次郎	みつなりさま めつそう 三成様、滅相も…。(押問答して後、泣きながら)

				<p>おい、徳川のお役人様、この洞穴に咎人の</p>
				<p>石田三成公が。早う捕まえに来ておくれやす。</p>
				<p>これで、わてら、年貢米が永久に免除やな一。</p>
			石田三成	<p>戦に勝つ者有れば敗れる者も居る、それは恥ではない。</p>
				<p>わしに足りなかったは、武運と、二心を抱く輩を見抜く目だ。</p>
				<p>だが、死ぬ間際に、人の情けというものに出会って本望じゃ。</p>
				<p>あの世で太閤殿下に出おうたら、家康よ、福島正則よ一、</p>
中央前 F・O				<p>お主らの裏切りを、よっくお伝え申そうぞ。</p>
			M⑭	ブリッジ 続き
			麻由蚕	<p>こうして、哀れ</p>
			タブロー	<p>石田三成様は、大坂・京都、市中引き回しの上、京都六条河原</p>
				<p>にて処刑されたの。享年41歳。</p>
			海野寛	<p>さあて、三成に与して負けた我らが真田の御大将の行く末やいかに。</p>
			M	F・O
中高 F・I			徳川家康	<p>(福笑い、すごろくをして遊んでいる)</p>
			真田信幸	<p>何卒、何卒、お願いあげ奉りまする。</p>
			徳川家康	<p>ならんならん。昌幸と信繁は領地没収の上死罪とする。</p>
				<p>そちがわしの娘婿であろうと、この決定は覆せぬ。</p>
				<p>わしも幼い頃に織田信長、今川義元の人質となって、12年を</p>
				<p>過ごし、忍耐においては、なかなかの者と自負しておる。</p>
				<p>しかし、今度ばかりは心底怒っておる。(福笑いを続けながら)</p>
			真田信幸	<p>もし、家康様が今までの、この真田信幸の忠節と手柄の全てを</p>
				<p>お認めになるならば、父と弟の命だけは助けて下さるように、</p>
				<p>伏してお願い申しまする。</p>
			本多忠勝	<p>殿、それがしからもお願い申し上げます。成程、</p>
				<p>真田昌幸には一度ならず煮え湯を飲まされ、この度の</p>
				<p>上田合戦においても、秀忠殿の軍勢38000を上田城に</p>

				と 留め置き、その所為で秀忠殿は関ヶ原の決戦に
				ま 間に合わず仕舞いで、面目丸つぶれ。
				その老獪な手練手管を思いますと、殿のお腹立ちはよく
				わ 分かり申す。なれど、此度ばかりは、この本多忠勝に免じて
				お許し下されい。
			徳川 家康	たとえ、忠義にかけては並ぶ者無し、徳川四天王と謳われた
				本多忠勝、そちの口添えであろうと、
				わしを裏切り、豊臣方に寝返った昌幸を、生かしておくことは
				できぬ。
			真田 信幸	かくなる上は、この信幸、兵を起し、殿と一戦仕る覚悟に
				ございます。
			徳川 家康	うーむ。言い出したら梃子でも動かぬそちのこと。
				致し方あるまい。
				大罪を犯した二人ではあるが、そちの助命嘆願、聞き届けると
				しよう。真田昌幸、信繁を高野山、九度山に追放と致す。
			信幸 忠勝	はは一つ、有難き幸せにございます。
			由利 鎌之助	(やったー！！)
	夕景 雪		M⑤	寂寥感の漂う音楽B・G
	前 F・I	鳥SE	映像 文字	タブ ロー 真田昌幸・信繁・一族郎党 出立。
	上高 F・I		由利 鎌之助	俺は天下無双の鎖鎌の名手、由利鎌之助。
				真田昌幸様54才、真田信繁様34歳。
				高野山に追放、蟄居の身とられた。
			穴山 小助	代われるものなら本当に代わって差し上げてえ。
			由利 鎌之助	そうよなあ。お主は、第一の影武者、穴山小助だからよう。
			穴山 小助	家臣僅か16人と共に、真田様は
				慶長5年1600年12月13日、上田城を出立。
			由利 鎌之助	以後、二人の殿様は、二度と郷里の真田に戻ることは

			映像文字	無 ^な かった。(昌幸夫人・山之手殿は上田に残り、信繁夫人と侍女、
				下働き ^{したばたら} の者 ^{もの} 十 ^{じゅう} 数名 ^{すうめい} が紀州 ^{きしゅう} に同行 ^{どうこう})
			M	F・O
			穴山小助	その三年 ^{さんねん} 後 ^ご 、家康 ^{いえやす} が征夷大將軍 ^{せいゐたいしやうぐん} として関東 ^{かんとう} 一帯 ^{いつたい} を支配 ^{しはい}
			映像文字	するようになった。信幸 ^{のぶゆき} 様 ^{さま} は、名 ^な を(信之 ^{のぶゆき} と)改 ^{あらた} められた。
	全F・O		M⑩	のどかな曲想 ^{まきくそう} に変わ ^か って、しばらくBG
				第七景 流人・九度山村の日々
衝立→ 囲炉裏	中央 F・I		百姓 仙蔵	今日 ^{きょう} も碁 ^ご を打 ^う ってはるんかいな、殿様 ^{とのさま} は。
				それ、それ、そこ、あー、負 ^ま けてしもた。
			村長清 左衛門	ありがとさんでした。ほな、わてはそろそろお暇 ^{いとま} を。
			百姓 仙蔵	可笑 ^{おか} しいなあ。村長 ^{むらおさ} 様に負 ^ま けるような殿様 ^{とのさま} ではねえ筈 ^{はず} やのに。
				なんせ、あの天下 ^{てんか} の家康公 ^{いえやすこう} に一泡 ^{ひとあわ} 吹 ^ふ かせて
				やりなされた程 ^{ほど} の知恵者 ^{ちえしや} と、噂 ^{うわさ} されておるんやからのう。
			村長清 左衛門	仙蔵 ^{せんざう} どん、真田 ^{まんだ} のお殿様 ^{とのさま} は、心中 ^{しんちゆう} 深く何か ^{なに} お考 ^{かんが} えがあります
				のやろ。この九度山 ^{くどやま} 村 ^{むら} においでなはって、早 ^は や十年 ^{じゅうねん} の上 ^{うえ} 。
				天下 ^{てんか} の成 ^な り行き ^{ゆき} を思 ^{おも} うと、そらもう、居 ^い ても立 ^た っても
				おられんはずじゃ。
			妻 早蔵	あの一 ^{なに} 何か ^た 足 ^た らないものはおまへんか？
			村長清 左衛門	家 ^{いえ} の者 ^{もの} に何 ^{なん} なりと届 ^{とど} けさせますよって、遠慮 ^{えんりよ} せんと
				い ^い 言 ^ぐ うて下 ^{くだ} さいよ。寒 ^{さむ} うなりますよって、薪 ^{まき} と炭 ^{すみ} はそこへほれ。
			妻 早蔵	ほんまに、世 ^よ が世 ^よ であれば、大坂城 ^{おおさかじょう} のご家老 ^{かろう} 方も
				一 ^{いちもく} 目 ^め 置 ^お くほどの大將 ^{たいしやう} として、腕 ^{うで} を振 ^ふ るえた筈 ^{はず} やのに。
				御 ^お 労 ^{いたわ} しゆうございます。
			百姓 仙蔵	そら、何 ^{なん} というたかて、あの徳川 ^{とくがわ} 家康 ^{いえやす} を再 ^{ふたたび} び三 ^{さん} 度
				震 ^{ふる} え上 ^あ がらせたっちゆう噂 ^{うわさ} は、上 ^{かみ} 方 ^{かた} ばかりか、
				この九度山 ^{くどやま} にも聞 ^き こえてまっせ。
			妻 志津	父 ^{とう} ちゃん、あんまり長 ^{なが} いこと邪 ^{じゃ} 魔 ^ま したらあかんよ。

				野菜、ここに置いてくさかないな。
				終わったらまた届けに来るよってな、たーんと食べとくれやす。
			妻 早蕨	あんじょうたのんませ。
				ほんまに、お志津はんの作らはる野菜は、美味しゅうおす。
				真心もいっぱい詰まっとなりますよってな。
				安心して上がっておくれやす。
				M F・O
			安岐 姫	まあまあ、ありがとう存じます。見事な蕪、父上も
				大好物でございます。葉っぱは葉っぱで、刻んで塩漬けに
				しても、大層おいしゅうございますものね。
			妻 志津	あれま、奥方様も、すっかり、
				この土地に慣れはったようで、ほんまによろしいわ。
				それでも、体だけは壊さんといて下さいよ。
				真田のお殿様はいつかきつと世に出なはるお方やさかい。
			安岐 姫	もったいないお言葉。涙が出ます。
				殿が戦でお留守の時は、一族郎党の食事から暮らし向き
				の遣り繰り。信濃でも、苦勞がなかったと言えは嘘になります。
				戦国の世に生まれた女の務めとは申せ、
				己の下を巢立ち赴く先は血で血を洗う戦場と知りつつ
				我が子を産み育てる母ゆえの辛さ、悲しさ…
				それを思えば、食べるに事欠く有様であろうとも、
				この紀州九度山の里での平安は、しばしの慰め。
			妻 早蕨	女子同士やさかい、ようわかりますえ。
			娘 ゆず	大助様は？ねえ奥方様、大助様はどこに？
			安岐 姫	ああ、ゆずちゃん、大助なら間もなく武芸の稽古から帰って…。
			真田 大助	母上、ただいま帰りました。
			百姓 与志	大助坊ちゃま、しばらく見ねえ間に、大きゅうなられましたなあ。

				のぶしげさま 信繁様 <small>に</small> によ <small>う</small> 似 <small>て</small> は <small>る</small> わ。
		村長清 左衛門	おおさかじょう 大坂城	何 <small>や</small> ら不 <small>ふ</small> 穩 <small>おん</small> な動 <small>うご</small> きがありました <small>よう</small> な。いや <small>な</small> に、
				くわ 詳 <small>し</small> ゆうは分 <small>わ</small> からしまへ <small>ん</small> のやけ <small>ど</small> な。
		娘 菖蒲	はほうえさま 母上様	あ、ほ <small>ら</small> 、里 <small>さと</small> の道 <small>みち</small> で見 <small>み</small> つけました。
		M⑩	イントロ <small>はい</small> 入 <small>う</small> って歌 <small>うた</small>	
		娘 お梅	ちがや 茅	はこうして <small>か</small> 嚙 <small>あ</small> んでい <small>と</small> 、味 <small>あじ</small> が <small>で</small> 出てくる <small>の</small> です <small>よ</small> 。
合唱 F・I		合唱		つーばな つばな 風 <small>かぜ</small> にゆ <small>ら</small> ゆ <small>ら</small> 花 <small>はな</small> 穂 <small>ほ</small> が揺 <small>ゆ</small> れる
				ゆ 揺 <small>ゆ</small> れる花 <small>はな</small> 穂 <small>ほ</small> は 茅 <small>ちがや</small> の娘 <small>むすめ</small>
			わたし どなた むすめ 私 <small>わ</small> や何 <small>ど</small> 方 <small>なた</small> の娘 <small>むすめ</small> やろ 真 <small>ま</small> 田 <small>だ</small> の殿 <small>との</small> 様 <small>さま</small> 信 <small>のぶ</small> 繁 <small>しげ</small> 様 <small>さま</small> の	
			むすめ あやめ 娘 <small>むすめ</small> の菖 <small>あ</small> 蒲 <small>やめ</small> にご <small>ご</small> ざ <small>い</small> ま <small>す</small> 娘 <small>むすめ</small> のお <small>お</small> 梅 <small>うめ</small> にご <small>ご</small> ざ <small>い</small> ま <small>す</small>	
				つーばな つばな 風 <small>かぜ</small> にゆ <small>ら</small> ゆ <small>ら</small> 花 <small>はな</small> 穂 <small>ほ</small> が揺 <small>ゆ</small> れる
合唱 F・O				ち 散 <small>ち</small> らぬ間 <small>あいだ</small> に ちよ <small>つ</small> と摘 <small>み</small> んで見 <small>み</small> よ <small>か</small>
		安岐 姫	まあ、二 <small>ふ</small> 人 <small>たり</small> ともど <small>こ</small> で覚 <small>おぼ</small> えた <small>の</small> 。上 <small>じょう</small> 手 <small>ず</small> に歌 <small>うた</small> え <small>ま</small> した <small>ね</small> 。	
		梅 菖蒲	ゆずちゃん <small>おし</small> に教 <small>おし</small> えても <small>ろ</small> た <small>の</small> 。	
		ゆず	つばな 茅花 <small>つばな</small> はたべ <small>ら</small> れる <small>ん</small> よ。そ <small>れ</small> に <small>す</small> い <small>ば</small> も、土 <small>つ</small> 筆 <small>し</small> も <small>な</small> 。	
		志津	おくがたさま これ、ゆず。奥 <small>お</small> 方 <small>か</small> 様 <small>さま</small> の前 <small>まえ</small> で…。	
		ゆず	だ <small>っ</small> て、お梅 <small>うめ</small> 様 <small>さま</small> も菖蒲 <small>さ</small> 様 <small>さま</small> も、い <small>つ</small> もお <small>な</small> か空 <small>す</small> かして <small>て</small>	
			き 毒 <small>どく</small> やも <small>ん</small> 、お姫 <small>ひめ</small> 様 <small>さま</small> な <small>の</small> に。	
			よ 世 <small>よ</small> が世 <small>よ</small> であ <small>ら</small> ば <small>っ</small> て、お <small>か</small> んが <small>い</small> つも <small>い</small> う <small>て</small> る <small>や</small> ろ。	
		仙蔵	わか <small>っ</small> たわか <small>っ</small> た。ほ <small>な</small> 、そ <small>ろ</small> そ <small>ろ</small> お <small>し</small> ま <small>ま</small> あ <small>ら</small> じ <small>よ</small> か <small>い</small> な。	
		ゆず	う <small>ん</small> 、ほ <small>な</small> 、さ <small>い</small> な <small>ら</small> 。	
		梅 菖蒲	さ <small>い</small> な <small>ら</small> 、ま <small>た</small> あ <small>そ</small> 遊 <small>あ</small> そ <small>ぶ</small> う <small>な</small> 。	
		真田 信繁	こ 子 <small>こ</small> ども <small>に</small> は、百 <small>ひゃく</small> 姓 <small>しょう</small> も侍 <small>さむらい</small> も <small>な</small> い。こ <small>れ</small> が <small>にん</small> げ <small>ん</small> と <small>い</small> う <small>も</small> の <small>の</small>	
			しぜん すがた 自 <small>し</small> 然 <small>ぜん</small> な姿 <small>すがた</small> な <small>の</small> であ <small>ら</small> う <small>な</small> 。	
		梅 菖蒲	あ <small>り</small> のま <small>ま</small> で レリ <small>れ</small> ゴ <small>ご</small> ー レリ <small>れ</small> ゴ <small>ご</small> ー	
		真田 昌幸	さいぜん (最 <small>さい</small> 前 <small>ぜん</small> より碁 <small>ご</small> 石 <small>し</small> から離 <small>はな</small> れて地 <small>ち</small> 図 <small>ず</small> を眺 <small>なが</small> めて <small>い</small> た <small>が</small>)	
			のぶしげ 信繁 <small>のぶしげ</small> 、そ <small>ち</small> に <small>はな</small> 話 <small>はな</small> して <small>お</small> き <small>たい</small> こ <small>と</small> が <small>あ</small> る。	

				だいすけ き 大助も聞くがよい。
			安岐 姫 むすめ (娘たちをいざない別室へ去る)	
			真田 昌幸 のぶしげ 信繁、わしはせめてあともう三年生き永らえたならば、	
			とくがわ たお たいこうさま おん かえ 徳川を倒し、太閤様にご恩を返せよう。	
			だが、それももはやかな ゆめ だが、それも最早叶わぬ夢。	
			真田 信繁 ちちうえ なに 父上、何をおっしゃいます。だいすけ うめ 大助やお梅のこれから先を	
			ぜひ みまも 是非とも見守って…	
			真田 昌幸 はっはっは…せじ い 世辞は要らぬぞ信繁。わしののぶしげ ひやく 秘策をそなたに	
			さず 授けたところで、さんねん いま 残念ながら今はまだ、おおさか じょうない 大阪城内には	
			そなたを認める者は誰一人いないであろう。	
			しかし、ここからがしょうぶ 勝負どころじゃ。	
			このさなだ はたじるし かか 真田の旗印を掲げたのは、わしのちち 父、そなたに	
			とってはおじいさまにあたるさなだ だんじょうのじょう ゆきたか 真田弾正忠 幸隆	
			しんげんこう まこと つ せ だんじょう よ おとこ 信玄公に信を尽くし、攻めの弾正と呼ばれた男だ。	
			だいすけ ろくもんせん いみ わ 大助、この六文銭の意味は分かっておろうな。	
			真田 大助 はい、ひと し 人が死んであの世とやらに行く時、	
			さんず かわ わた ちん ろくもん ろくもん はたじるし 三途の川の渡し賃は六文だとか。その六文を旗印に	
			したのは、けつし かくご たたか おし ふしやくしんみょう きがま 決死の覚悟で戦えとの教え。不惜身命の気構えで	
			いくさば た ちちうえ き 戦場に立つのだと父上から聞きました。	
			真田 昌幸 うむ、でかしたぞだいすけ きょう 大助。さすれば今日からは、	
			ろくもんせん はた かか おおさか まちなか あか そ おん たいしやう 六文銭の旗掲げ、大坂の町中を赤く染めぬく御大將は、	
			のぶしげ こころえ 信繁、そなたじゃと心得よ。	
			かぶと しか つの てつ う さと とうりやう しるし 兜は鹿の角、鉄を打つ里の頭領の印じゃ。	
			真田 大助 おじいさま わたし わたし ちちうえ とも おおさか まち おじい様、私も、私もお父上と共に、大坂の街で	
			いくさばたら 戦働きをしようございます。だいすけ さくせん おし くだ 大助にも、作戦を教えてください。	
			真田 昌幸 はっはっはっ…なかなかの頼もしいのう。よし、だいすけ 大助、	
			そちはひでよりさま そば ちか つか まも 秀頼様のお側近くお仕えしてお守りするのじゃ、	

				よいな。
			真田 大助	しかと約束いたします。
			真田 昌幸	したが、
				この九度山で恩赦の知らせを今か今かと待っておるうちに、
				早十五年。流人暮らしは長かったのう。
			安岐 姫	(子らと共に手に荷物などを掲げて来る)
			安岐 姫	お父上、あなた、松代の信幸様から、金子とお手紙が
				届きました。暖かそうな綿入れも氷餅も入っております。
			タブ ロー	兄上の奥方、小松殿がご手配下されたのでしょうか。
				いつもながらのお心遣い、有難いことでございます。
			真田 昌幸	信之にも伝えてくれ、母を頼むと。そして体を労れとな。
	中央 F・O		真田 信繁	父上、しかと承りました。
			文字	真田昌幸死去。享年65歳。
酒膳→	中央 F・I		M® B・G	
			里人	(宴を催している。飲めや歌えの賑やかさに酔いつぶれて
				居る人々…)
			徳川 勢	真田信繁と一門の者は、いずこに居る？
			清左 衛門	へえ、三日ほど前にこの九度山をお立なされた。
				何処へ？さあ、行く先は聞いておりやせんがのう。
			百姓 お壹	あたしら、この村から厄介者が居なくなって、
				せいせいしとるんよ。
			百姓 お佐和	流人ちゅうのは、なんや、辛気臭い顔してほんま
				叶わんさかいなあ。そやけど、
			仙蔵	わしらに長年世話になったからと、信繁さまが振る舞い酒を
				ほれ、この通り…
			与志	わしら、一杯喰わされたか知んねえなあ。
				わしらを酔わせておいて、その隙に大阪目指して

				ひどいお人じゃあ、真田様はよう。
			信繁 一行	(物陰から涙を流し、見ている。手を合わせる。)
衝立← 團扇裏			村人ら	(役人が立ち去ると、これも泣きながら、頭を下げる。)
酒膳←			清左 衛門	真田のお殿様、ご武運をお祈り申し上げます。
			M	F・O
			真田 信繁	九度山の皆の衆、忝い。長の年月世話になり申した。
				父のご家来衆は上田にお帰り下され。
				わしは、今から大坂城に向かう。
				太閤様の恩義に報いるため、目指すは打倒家康。
				意志あるものは我に続け。父祖の地より掲げて参った
				六文銭の旗印の下、真田三代の心意気を大阪城内に
				見せてくれようぞ。
合唱 F・I			M⑱	イントロ入って歌
			合唱	生きるのは 戦うのは 何故に
				愛とは 信義とは 何処に
				君も探しているのか 歩むべき道を
				ならば 共に進み行こう
				(別パートが下の歌詞に被って歌う 生きる 戦う 愛 信義)
				この戦国の世に 咲く花が
				朱の血潮に 染められようと
				進み行こう 共に
			M	B・G
下高 F・I			徳川 家康	何、真田が大坂城へ入ったとな。うーむ。して、それは
				親の真田か子の真田か。何、子の方じゃとな。
				左衛門之佐信繁じゃな。
				(震えていた手が止まる)ならば、取るに足らぬ若輩者よ。
下高 F・O				まだまだこの家康の相手ではない。

第八景 大阪城出丸造営			
中央 前面	人夫 たちと		(出丸を築いている。もっこをかつぎ土を運び、大榎を振るい、)
	十勇 士		鉦をかけ、荒縄で結わえ、竹垣を組み…)
	真田 信繁		皆の衆、大儀でござる。さ、もう一息で、出丸が完成じゃ。
			大坂城が守りにおいてはいかに三国一の堅固な城と
			言っても、只一つの弱点は、この南口の守り。
			それ故、ここに出城を築き、立てこもりの戦に備えるのだ。
	CD声	声1	軍略に長けた昌幸殿がご存命ならば兎も角も、あんな
			小童に何ができよう。
		声2	豊臣から送られた黄金200枚に目が眩んだのじゃろう。
			九度山での流人暮らしは、さぞ衰れだったに違いない。
		声3	あんな南の空堀に出丸を築いて、もしや、徳川方に残った
			兄の信之勢を引き入れる算段ではあるまいか。
		声4	じゃとすると、止めさせねばなるまいて。早速、大野治長殿に
			お知らせして、真田信繁の出丸を打ち壊してくれようぞ。
		全	おお、それが良い。善は急げじゃ。ご注進、ご注進…etc
	後藤 又兵衛		待たれよ各々方。
		声2	あっ、後藤又兵衛殿。
		声3	又兵衛殿は虎と組討した勇猛果敢なお方じゃ。
		声2	摩利支天の再来と呼ばれるほどの采配に優れた武将よ。
		声4	その又兵衛様が何用でござるか。
	後藤 又兵衛		考えても見やれ。大坂城に立てこもり、籠城戦を唱えた
			各々方の中で、只一人、出陣を叫んだは信繁殿。
			その信繁殿に何の二心があろう。敵に打ち勝つ前にまず、
			味方に勝たねばならぬ辛さは、わしも数々味わっておる。
			土台、大野治長殿じゃとて、家康から大阪へ寝返った
			お方ではないか、うん？

			一同	それはそうであるが…、 ^{たれ} 誰しも ^{すね} 脛に ^{きず} 傷持 ^も つ ^み 身は ^{おな} 同じでござるよ…
			声1	だがしかし、 ^わ 我が ^{おおさかじょう} 大坂城は ^{なんこう} 難攻 ^{ふらく} 不落。持 ^{じきゆうせん} 久戦に ^も 持 ^こ 込めば
				^{いえやす} 家康 ^ね じゃとて、 ^ね すぐに ^あ 音を ^あ げ ^る じやろう。(ま ^{った} ま ^{った} く…)
			後藤 又兵衛	^{のぶしげどの} さ、 ^{ひとたび} 信繁 ^{くんぎ} 殿、 ^き 一度 ^き 軍議 ^き で ^き 決 ^ま った ^の じや。お ^{おも} ことの ^{おも} 思 ^{おも} う ^ま ま ^ま に、
				^{でまる} 出丸 ^{きず} を ^き 築 ^く が ^よ か ^ら う。
			M	^も 盛 ^あ り ^あ が ^あ って ^あ F・O
			紅葉	^{どうちゆうすがた} (道中 ^{たお} 姿 ^こ で、 ^{ほか} 倒 ^{おんな} れ ^{ふたり} 込 ^{かいほう} む。他 ^{しか} の ^か 女 ^か 二 ^か 人 ^か が ^か 介 ^か 抱 ^か 仕 ^か 掛 ^か け…)
			人夫 ら	(^か わ ^ら わ ^ら と ^か 駆 ^よ け ^よ 寄 ^よ る)
			紅葉	(^{せき} 咳 ^{せき} を ^{せき} し ^{せき} な ^{せき} が ^{せき} ら)あ ^{せき} り ^{せき} が ^{せき} と ^{せき} う ^{せき} ご ^{せき} ざ ^{せき} ん ^{せき} す。
				もし ^{のぶしげ} や ^{さま} こ ^い の ^{かた} あ ^{かた} た ^か りに、 ^い 信 ^{かた} 繁 ^{かた} 様 ^{かた} と ^{かた} 言 ^{かた} う ^{かた} お ^{かた} 方 ^{かた} は…?
			十勇 士	^の 殿。(と ^{のぶしげ} 信 ^か 繁 ^よ に ^よ 駆 ^よ け ^よ 寄 ^よ り)
			真田 信繁	^{のぶしげ} 信 ^か 繁 ^よ は ^よ わ ^よ し ^よ じ ^よ が ^よ 、 ^よ そ ^よ な ^よ た ^よ は。
			紅葉	^{べん} 弁丸 ^{まる} 様 ^{さま} 、お ^{なつ} 懐 ^{なつ} かし ^{なつ} ゆう ^{なつ} ご ^{なつ} ざ ^{なつ} ん ^{なつ} す。お ^{おほ} ら ^{おほ} を ^{おほ} 覚 ^{おほ} え ^{おほ} て ^{おほ} い ^{おほ} な ^{おほ} さ ^{おほ} る ^{おほ} か ^{おほ} い ^{おほ} の ^{おほ} う。
			真田 信繁	もし ^{もみじ} や ^{もみじ} そ ^{もみじ} な ^{もみじ} た ^{もみじ} 、 ^{もみじ} 紅 ^{もみじ} 葉 ^{もみじ} 、 ^{もみじ} 紅 ^{もみじ} 葉 ^{もみじ} か。
			紅葉	ああ、 ^{うれ} 嬉 ^{うれ} しい。 ^{わす} 忘 ^{わす} れ ^{わす} て ^{わす} い ^{わす} な ^{わす} ん ^{わす} だ ^{わす} だ ^{わす} か。
			葦菜	お ^{あし} ら ^{あし} は ^{あし} 葦 ^{あし} 菜 ^{あし} 。
			水樹	お ^{みずき} ら ^{みずき} は ^{みずき} 水 ^{みずき} 樹 ^{みずき} だ。
			真田 信繁	お ^{まえ} お、お ^お 前 ^お た ^お ち ^お も ^お 、 ^お い ^お っ ^お し ^お よ ^お か。 ^お 幼 ^お 顔 ^お の ^お 面 ^お 影 ^お は、 ^お う ^お ん、 ^お た ^お し ^お 確 ^お か ^お に。
			葦菜	や ^ふ だ ^ふ よ ^ふ う。ず ^い い ^い ぶ ^い ん ^い 老 ^い け ^い た ^い な ^い つ ^い て ^い 言 ^い い ^い た ^い そ ^い う ^い な ^い 顔 ^い して。
			真田 信繁	し ^お て、 ^お は ^お る ^お ば ^お ら ^お と ^お こ ^お の ^お 大 ^お 阪 ^お く ^お ん ^お だ ^お り ^お ま ^お で ^お 何 ^お し ^お に…。
			紅葉	^{のぶしげ} 信 ^{さま} 繁 ^{さま} 様 ^{さま} が ^お 大 ^お 坂 ^お 城 ^お に ^お 入 ^お ら ^お れ ^お た ^お つ ^お て、 ^う 上 ^だ 田 ^の の ^の 信 ^の 之 ^の 様 ^の か ^ら
				^き 聞 ^き い ^き て ^き た ^き だ ^き よ、 ^{のぶしげ} 信 ^{さま} 之 ^{さま} 様 ^{さま} は ^い 今 ^い お ^い 体 ^い を ^い 悪 ^い く ^い さ ^い れ ^い て ^い て ^い な、 ^か ら ^だ わ ^る
			真田 信繁	^あ 兄 ^あ 上 ^あ が ^あ ? ^あ 兄 ^あ 上 ^あ と ^あ 戦 ^あ わ ^あ ず ^あ に ^あ 済 ^あ む ^あ の ^あ は ^あ 有 ^あ 難 ^あ い。
			紅葉	そ ^{べん} い ^{べん} で ^{べん} 弁丸 ^{さま} 様 ^{さま} 、 ^{のぶしげ} いや ^{のぶしげ} あ ^{のぶしげ} 信 ^{さま} 繁 ^{さま} 様 ^{さま} の ^{さま} お ^{さま} じ ^{さま} い ^{さま} 様 ^{さま} 、 ^ゆ 幸 ^ゆ 隆 ^ゆ 様 ^ゆ の ^ち 長 ^ち 谷 ^ち 寺 ^{くじ} が
				^う 上 ^だ 田 ^が 合 ^つ 戦 ^{せん} で ^や 焼 ^や け ^や ち ^や ま ^や つ ^や た ^や ず ^や ら。
			葦菜	そ ^ち い ^ち で、 ^ち お ^ち 父 ^ち 上 ^ち と ^{のぶしげ} 信 ^{さま} 繁 ^{さま} 様 ^{さま} が ^{きしゅう} 紀 ^き 州 ^{しゅう} に ^あ い ^あ な ^あ さ ^あ る ^あ 間 ^あ に、
			水樹	^く 熊 ^く 野 ^く 詣 ^く に ^い 一 ^い 度 ^い は ^い 行 ^い き ^い て ^い え ^い と ^は 話 ^は が ^ま と ^ま つ ^ま て ^ま な。

				そうすりや、九度山に流されていなさる殿様にも会えるだし、
			葦菜	霊験鮮かな阿弥陀如来様も拝めるだ、って思ってたら
				殿様、大坂に入られたって聞いたもんだでな。
				そいで、おらたちや。
			水樹	ほれ、百草丸が土産だ。御嶽山の山伏修験者の道を
				通ってきたでな。浪速の水に当たたら、これ呑んでおくりよ。
			真田 信繁	忝い。お主ら、いつまで。
			水樹	しばらく浪速見物でもさせてもらうで。ふんとに有難えわやあ。
			真田 信繁	それ、皆の衆。大阪城内五つ目の曲輪の完成じゃ。
				これを機に今日より、この真田左衛門之佐信繁は、
	中前 F・O			真田幸村と名乗ろう。そしてこの出城は、真田丸じゃー。
			M◎	勇壮なブリッジ
				第九景 大坂冬の陣
屏風→	中高 F・I		淀殿	片桐且元が徳川に寝返ったと申すか。
			豊臣 秀頼	大坂市中では、そのように噂されていると、大野治長の
				手の者から聞き及びました。
			淀殿	(頰れる)
			千姫	母上様、お気を確かに。
			侍女 楓	千姫様、ここは私どもにお任せ下さいまし。
				母上様は、ご心労が重なっておいでなのです。萩野。
			侍女 萩野	はい、千姫様、さあこちらに。ここならば安心してございます。
				しばらくこちらでお休みくださいまし。
			侍女 寿々菜	(楓と共に淀殿を介抱する)
			侍女 撫子	(千姫の相手をする)
			豊臣 秀頼	思えばこの度、落慶なった
				東山方広寺に家康からは無理難題を。挙句の果てに…。
			千姫	釣鐘に刻んだ国家安康、君臣豊楽の文字が、家康様への

				<p>のろ 呪いの言葉だと大層ご立腹なのどうか。</p>
				<p>かたぎりどの 片桐殿はその執り成しに出かけられたのですね。</p>
			豊臣 秀頼	<p>そもそも、釣鐘の文字は</p>
				<p>わ 我が豊臣を滅ぼさんがための言いがかり。</p>
				<p>かたぎり かつもと 片桐且元ほどの武將が、寝返るなどと…。これにはきつと</p>
				<p>なに わけ 何か訳があるのであろう。</p>
			千姫	<p>はい、秀頼様。千はいかに徳川秀忠を父に持ちましようとも、</p>
				<p>いま ひでよきさま つま ひとぢ 今は秀頼様の妻。人質になって江戸へなり何処へなりとも</p>
				<p>まい 参りましようほどに。</p>
			豊臣 秀頼	<p>せん 千はそのようなこと心配せずとも良い。</p>
			淀殿	<p>ひでよきさま な 秀吉様が亡くなられると、一人二人と櫛の齒を挽くように</p>
				<p>とよとみ き とくがわ の か もの 豊臣を去り徳川に乗り換える者ばかり。</p>
			侍女 楓	<p>おくがたさま 奥方様、ほんに酷い仕打ち。口惜しゅうございます。</p>
			侍女 萩野	<p>な たいこう でんか 亡き太閤殿下がおられたなら、お嘆きいかばかりかと。</p>
			豊臣 秀頼	<p>しまづ ほそかわ はちすか まえだ がもう だて ことごと 島津、細川、蜂須賀、前田、蒲生、伊達…悉く</p>
				<p>はな き 離れ去りましたなあ。</p>
			淀殿	<p>そのような中であって、</p>
				<p>かたぎり かつもと きよう よわた 片桐且元だけは器用に世渡りなどできぬ無骨者。</p>
				<p>ゆえ ひでよきさま もつと しんらい それ故、秀吉様も最も信頼しておられた。</p>
				<p>たよ おや な ころ う あ そうだん あいて 頼れる親もとうに無く、心を打ち明けて相談できる相手もなく、</p>
				<p>おおさかじょう こりつ むえん よ ベ われ この大坂城で孤立無援の寄る辺ない我らに、</p>
				<p>かつもと しんじつ ころね つか 且元は真実の心根をもって仕えてくれました。</p>
				<p>のち ひでよきどの も た おも やさき この後も秀頼殿を盛り立ててくれると思っていた矢先に…。</p>
			豊臣 秀頼	<p>はほうえさま いさ はじ 母上様、まだ戦は始まったばかり。事の成り行きを</p>
屏風←	中高 F・O			<p>みさだ 見定めようではございませぬか。</p>
	前面 F・I	銃撃 叫び声	真田 幸村	<p>(じゅうげきせん しき と 銃撃戦の指揮を執る。)</p>
				<p>よいか、空堀の際まで敵を引き寄せ、出丸と惣構えの</p>

				りようほう 両方から、攻撃する。
				とよとみ ぐん まん とくがわ ぐん 豊臣軍は10万、徳川軍はその2倍、20万の兵じゃ。
				しかし、決死の覚悟で当たれば、必ず勝てる。
				やだま じゆんび おこた 矢玉の準備、おさおさ怠るなよ。
				てっぽうたい う 鉄砲隊、撃て一。
				ちやうすやま ほんじん いえやす め もの み 茶臼山本陣の家康に、目に物見せてくれようぞ。
			M④	B・G
		文字		おおさかふゆ じん ぼつぼつ けいちやう ねん ねん 大坂冬の陣 勃発 慶長19年(1614年)
			銃撃戦	(銃撃戦に被って声が流れる。)
			声1	さすが、真田三代の兵法を受け継ぐ幸村様よ。
			声2	徳川勢め、空堀を越えようとすれば惣構えから
				惣構えを進もうとすれば真田丸から、一斉攻撃。
				手も足も出ぬ有様。
			声3	東軍の屍が累々と折り重なって、お濠は血の海よ。
			声4	この攻防戦、真田丸の大手柄よ。
	前面 F・O		声5	天晴れ、信濃の国の武将・真田幸村。大した武士よ。
	下高 F・I		徳川家康	真田幸村、おのれ一。
				親父の昌幸ならば手強い相手と見たが、幸村はまだ
				若造と、つい油断したらば、この始末。
				えーい、かくなる上は、作戦の変更じゃ。先だって
	下高 F・O			エゲレス、ポルトガルから買い入れたカルバリンの砲を持て。
	中高 F・I		淀殿	(千姫、侍女らと共におびえている。)
			豊臣秀頼	母上、音が変わりました。どうやら、大砲の威嚇攻撃です。
			侍女	(砲弾に当たって次々に倒れる。)
			淀殿	秀頼殿、和睦を。早う和睦を申し入れなさい。
				今しがた8人目の犠牲が出ました。
	中高 F・O			これ以上はもう、我慢なりませぬ。

第十景 大坂夏の陣			
			M F・O
下高 F・I	徳川 家康		なるほど とよとみ わぎ もう こ 成程、豊臣は和議を申し込んできたか。
			いやす おも とお この家康の思った通りじゃ。
			なに よどどの ひとぢち えど む 何？淀殿が人質になって江戸に向かうとな？
			むね ただ き もど わぎ じょうけん いやす くだ その旨、直ちに差し戻せ。和議の条件はこの家康が下す。
			よいか、ほんまる のこ よいか、本丸を残して、
			に まる さん まる う こわ おおさかじょう そとほり うめ た 二の丸・三の丸を打ち壊し、大坂城の外堀を埋め立てる。
下高 F・O			とよとみ がた みずか うちほり う よって豊臣方は自ら内堀を埋めよと、即刻伝えるがよい。
中高 F・I	淀殿		なん いやす そとほり うちほり うめ た 何としたこと。家康は、外堀ばかりか内堀も埋め立てたとな。
			てんか むてき しろ いま はだかろ 天下無敵の城が、今では裸城…。
	豊臣 秀頼		いやす さくやく うちほり ねんげつ これが、家康の策略であったか。内堀は年月をかけ
			うめ た ゆっくりと埋め立てておれば、その間に家康も年を取り
			な おも ござん 亡くなると思うたは、とんだ誤算。
			はほうえ しろ もはや ろうじょう むり ひでより 母上、この城では最早籠城は無理。これからはこの秀頼も
中高 F・O			しろ で たたか 城を出て戦うことになりましょう。
			M㊸ おお はい 雄々しく入ってB・G
前面 F・I	文字		おおさかなつ じん ぼつぼつ けいじょう ねん ねん 大坂夏の陣 勃発 慶長20年(1615年)
	真田 赤備え		ろくもんせん はた かか いっせい た あ (六文銭の旗を掲げ、一斉に立ち上がる。)
	真田 幸村		さいはい て ちゅうおう た (采配を手に、その中央に立つ)
第十一景 戦国散華			
	真田 幸村		かんとう ぜい ひやくまん いえど おとこ ひとり お 関東勢は百万と雖も、男は一人も居らぬのかー。
			わ さなだ さんぜん あか ぞな あいて いた ならば、我が真田三千の赤備えがお相手致そう。
	立ち 回り		じゅう ゆうし へい も あ (十勇士と、兵、盛り上げる)
	猿飛 佐助		との ごとう またべえどの すすきた かね すけの だて まさむね じゅうだん 殿、後藤又兵衛殿、薄田兼相殿が伊達政宗の銃弾にて
			うちじに 討死なさいました。
	紅葉		あが 危ない。うっ。(佐助をかばい敵の流れ弾に当たって倒れる)

			M	F・O
			真田 幸村	もみじ 紅葉、そちはもしや…。
			紅葉	はい、 ^{さるとび} 猿飛 ^{さすけ} 佐助 ^{はは} の母でございます。
				^{さすけ} 佐助は、 ^{とりのい} 鳥居 ^{とうげ} 峠 ^{ふもと} の麓 ^か 、 ^か 神川 ^{うぶゆ} に産湯をつかい、
				^{とざわ} 戸沢 ^{はくわん} 白雲齋 ^{さい} 様から ^{こうが} 甲賀 ^{りゅう} 流 ^{にんぼう} の忍法 ^{まな} を学び、
				^{さる} 猿 ^む の群れ ^{たわむ} と戯れているところを、 ^{ゆきむら} 幸村 ^{さま} 様に見 ^み いだされ…。
			葦菜	^{しげの} 滋野 ^{いちぞく} 一族が、 ^{うんの} 海野 ^{ねづ} ・ ^{もちづき} 根津 ^わ ・ ^わ 望月 ^{はなし} に分かれたって話
				^{との} 殿も ^{ぞんじ} ご存知 ^だ ら。あたいら、
				その ^{もちづき} 望月 ^{しなの} の信濃 ^{らっぱ} 乱破 ^な なのさ。
			水樹	^{りゅうりゅうしんく} 粒粒 ^{きなた} 辛苦 ^{とのさま} の真田 ^{いっせ} の殿様 ^{いちだい} 、 ^は 一世 ^{すがた} 一代 ^は の晴れ姿
				^{じゃま} 邪魔 ^{やつ} する奴 ^は はただ ^{じゃ} おけ ^{ない} 。そこであたいら、
				^{おおさかじょう} 大坂 ^{ない} 城内 ^{しの} に忍 ^こ び込 ^{じょうほう} んで、 ^{さく} 情報 ^を 探 ^{って} いた ^の さ。
			葦菜	^{きょうと} 京都 ^{まちぶぎょう} 町奉行 ^{いたくら} 、 ^{かつしげ} 板倉 ^{勝重} 、
			水樹	^{まつしろ} 松代 ^{かいづ} 海津 ^{じょう} 城 ^{おぼた} ゆかり ^{かげ} の ^{のり} 小幡 ^{景憲}
			葦菜 水樹	こいつら ^{ふたり} 二人 ^{にお} 匂 ^う ねえ。
			水樹	^{とのさま} お殿様 ^{ようじん} 、用 ^こ 心 ^{して} く ^だ さい ^{まし} な。
				き ^て つと、 ^た 手柄 ^{を立て} 、
				^{とくがわ} 徳川 ^{ねがえ} に寝返 ^く る ^{もの} 食 ^わ せ ^物 にな ^り ま ^し ょう。
			紅葉	^{さすけ} 佐助 ^は の ^{すがた} 晴 ^め れ姿 ^や 、 ^つ この目 ^は に ^は しか ^わ と ^た 焼 ^は き ^わ 付 ^ら け、 ^は 母 ^は は ^わ ら ^た び ^だ 笑 ^っ て ^た 旅 ^だ 立 ^て
				ますよ。 ^{わたし} 私 ^{ぶん} の分 ^{どの} ま ^{ほうこう} でも ^を 殿 ^に ご ^奉 公 ^{して} お ^く り ^や れ。
				^こ 子 ^{むかし} ども ^{とも} の昔 ^{あそ} 、 ^{べん} 共 ^{まる} に ^{さま} 遊 ^{やさ} んだ ^{こえ} 弁丸 ^様 の優 ^い しい ^お 声 ^が 、
				^{いま} 今 ^{みみ} も ^{おく} 耳 ^の 奥 ^の に ^こ 残 ^っ て ^お り ^ま す…
		SE 幼少声		よーし、それなら、わしが ^か 変 ^わ わ ^っ て ^や ら ^う 、 ^{もみじ} 紅葉 ^な 、 ^な 泣 ^か ず ^と も
				よいぞ。鬼 ^{おに} は ^わ し ^だ わ ^し だ。鬼 ^{おに} だ ^ぞ う。
				その ^{やさ} お優 ^{わす} しさが ^{わす} 忘 ^れ られ ^ず 、 ^{やく} お役 ^た に ^た ち ^と う ^て 浪 ^な 速 ^ま で…
				^{おも} 思 ^の い ^こ 残 ^す こ ^は は ^も う ^ご ざ ^い ま ^せ ぬ。
			佐助	^{かあ} お ^お 母 ^お 、 ^お 幼 ^う 心 ^つ にお ^ら の ^お 母 ^は は ^う つ ^つ く ^ひ 美 ^と しい ^人 じ ^ゃ つ ^た と、

				諸 ^{しよこく} 国 ^{あんぎや} 行 ^{たび} 脚 ^{ぞら} の旅 ^{たび} 空 ^{ぞら} でお ^ら あ、い ^つ も ^お も ^い だ ^だ し ^だ て ^だ た。
				ほ ^ん と ^と じ ^じ ゃ ^あ あ。お ^お つ ^つ 母 ^あ 、せ ^せ つ ^つ か ^あ く ^あ 会 ^あ え ^あ た ^あ ん ^あ じ ^あ ゃ ^あ ね ^あ え ^あ か、
				死 ^し な ^な ね ^ね え ^え で ^で お ^お く ^く れ ^れ よ。
		猿 ^し 飛 ^な 菜 ^ら		信 ^し 濃 ^の 乱 ^ら 破 ^っ に ^ぱ ゃ ^あ 、家 ^か 族 ^{ぞく} は ^は ご ^ご 法 ^ほ 度 ^{つと} 。
				そ ^そ れ ^れ が ^が 望 ^{もちづき} 月 ^{いち} く ^{おきて} ノ ^{さすけ} ー ^わ の ^お 掟 ^{おも} だ ^な 。佐 ^さ 助 ^{すけ} 、悪 ^{わる} く ^お 思 ^{おも} う ^う な ^な よ。
		水 ^み 樹 ^{じゆ}		さ、こ ^こ は ^は あ ^あ た ^た い ^い ら ^ら に ^に 任 ^ま せ ^か て ^て 、と ^と の ^い 殿 ^{きさ} は ^は 戦 ^{せん} に ^に 。
				命 ^{いのち} 知 ^し ら ^ら ず ^ず の ^の く ^く ノ ^{いち} ー ^し 、ど ^ど こ ^こ で ^で 死 ^し の ^の う ^う と ^と 生 ^い き ^き よ ^よ う ^う と
前 ^ま 面 ^め	F・O			端 ^は っ ^な か ^か ら ^か 覚 ^{かく} 悟 ^ご は ^は で ^で き ^き て ^て お ^お り ^り ま ^ま す ^す よ。
中 ^{ちゆう} 高 ^{かう}	F・I	真 ^ま 田 ^た	幸 ^{きん} 村 ^{むら}	後 ^ご 藤 ^{とう} 又 ^{また} 兵 ^{べい} 衛 ^{えい} 殿 ^{どの} に ^に 続 ^{つづ} い ^い て ^て 、古 ^こ 参 ^{さん} の ^の 木 ^き 村 ^{むら} 重 ^{しげ} 成 ^{なり} 殿 ^{どの} も ^も 失 ^う し ^な い ^い 、
				援 ^{えん} 軍 ^{ぐん} と ^と て ^て な ^な く ^く 、味 ^み 方 ^{かた} は ^は 、窮 ^{きゆう} 地 ^ち に ^に 追 ^お い ^い 込 ^こ ま ^ま れ ^れ て ^て お ^お り ^り ま ^ま す ^す 。
				な ^な に ^に と ^と ぞ ^ぞ 、秀 ^{ひでより} 頼 ^{さま} 様 ^{さま} に ^に ご ^ご 出 ^{しゆ} 馬 ^{つば} を ^を 。す ^す れ ^れ ば ^ば 、
				兵 ^{へい} の ^の 士 ^し 気 ^き も ^も 高 ^{たか} ま ^ま り ^り 、敵 ^{てき} に ^に 一 ^{ひと} 泡 ^{あわ} 吹 ^ふ か ^か せ ^せ て ^て や ^や れ ^れ ま ^ま し ^し ょう ^う 。
				今 ^{いま} こ ^こ の ^の 時 ^{とき} こ ^こ そ ^そ 、な ^な き ^き 秀 ^{ひでより} 吉 ^{さま} 様 ^{さま} の ^の 忘 ^{わす} れ ^れ 形 ^が 見 ^み 、
				秀 ^{ひでより} 頼 ^{さま} 様 ^{さま} の ^の ご ^ご 出 ^{しゆ} 馬 ^{つば} を ^を 。
		淀 ^{いづみ} 殿 ^{どの}		い ^い か ^か に ^に 幸 ^{ゆきむら} 村 ^{どの} 殿 ^お の ^の 仰 ^{ひでより} せ ^い で ^で も ^も 、秀 ^い 頼 ^{くさ} を ^を 戦 ^{せん} 場 ^ば に ^に と ^と は ^は 、
				と ^と ん ^ん で ^で も ^も な ^な い ^い 戯 ^{たわ} 言 ^{ごと} 。命 ^{いのち} が ^が 幾 ^{いく} つ ^つ あ ^あ ろ ^ろ う ^う と ^と 足 ^た ら ^ら ぬ ^ぬ わ ^わ 。
		真 ^ま 田 ^た	幸 ^{きん} 村 ^{むら}	こ ^こ の ^の 幸 ^{ゆきむら} 村 ^{かな} 、必 ^ひ ず ^ず や ^や 秀 ^{ひでより} 頼 ^{さま} 様 ^{さま} を ^を お ^お 守 ^{まも} り ^り し ^し て ^て 、凱 ^{がい} 旋 ^{せん} し ^し ま ^ま し ^し ょう ^う 程 ^{ほど} に
				何 ^な 卒 ^そ 、ご ^ご 出 ^{しゆ} 陣 ^{じん} 下 ^{くだ} さ ^さ れ ^れ 。
		淀 ^{いづみ} 殿 ^{どの}		秀 ^{ひでより} 頼 ^み の ^の 身 ^み に ^に 危 ^き 険 ^{けん} が ^が 及 ^{およ} ぶ ^ぶ と ^と 知 ^し っ ^い て ^て 居 ^い な ^な が ^が ら ^ら 、城 ^{じやう} 外 ^{がい} に ^に 出 ^で よ ^よ と ^と は
				そ ^そ な ^な た ^た は ^は や ^や は ^は り ^り 、報 ^{ほう} 奨 ^{しょう} 金 ^{きん} 目 ^め 当 ^あ て ^て に ^に 秀 ^{ひでより} 頼 ^{くび} の ^の 首 ^ほ が ^が 欲 ^ほ しい ^い の ^の か ^か 。
中 ^{ちゆう} 高 ^{かう}	F・O			問 ^{もん} 答 ^{たう} 無 ^む 用 ^{よう} で ^で す ^す ぞ ^ぞ 。(去 ^さ る)
前 ^ま 面 ^め	F・I	真 ^ま 田 ^た	幸 ^{きん} 村 ^{むら}	や ^や は ^は り ^り 、父 ^{ちち} 上 ^{うえ} の ^の 言 ^い わ ^わ れ ^れ た ^た 通 ^{とお} り ^り 。
				こ ^こ の ^の 大 ^{おお} 坂 ^{さか} 城 ^{じやう} 奥 ^{おく} 深 ^{ふか} く ^く に ^に 、私 ^{わたし} の ^の 力 ^{ちから} は ^は 及 ^{およ} ば ^ば な ^な か ^か つ ^つ た ^た 。
				あ ^あ あ ^あ 、父 ^{ちち} 上 ^{うえ} 、幸 ^{ゆきむら} 村 ^{むら} 、己 ^{おのれ} の ^の 無 ^む 力 ^{りき} さ ^さ を ^を 今 ^{いま} ほ ^ほ ど ^ど 痛 ^{つう} 感 ^{かん} し ^し た ^た こ ^こ と ^と は
				あ ^あ り ^り ま ^ま せ ^せ ぬ ^ぬ 。
				兄 ^{あに} 上 ^{うえ} 、兄 ^{あに} 上 ^{うえ} は ^は い ^い か ^か に ^に 過 ^す ご ^ご し ^し て ^て お ^お ら ^ら れ ^れ る ^る 。
				幸 ^{ゆきむら} 村 ^{むら} 、真 ^ま 田 ^た を ^を 束 ^ぶ ね ^ね る ^る 武 ^ぶ 将 ^{しょう} の ^の 家 ^{いえ} に ^に 生 ^う ま ^ま れ ^れ た ^た 縁 ^{えん} で ^で 、

				いく 幾たびかの ひとじち 人質も くだやま 九度山での ちつきよ 蟄居の おり 折も
				ちちうえ 父上と かにじゃ 兄者に 守られ、 世の 荒波にも 沈むことなく、
				きょう 今日まで 捨て身で 生きて 参りました。
				だが けれど、 今度ばかりは 幸村、 万策 尽きました。
			十勇士	との 殿、 おんたいしょう 御大将…(と、 口々に 周りを 取り 囲む)
			真田幸村	この 命 投げ 打って と思ったが… どうか、
				わしには、 十万の 援軍は 居らずとも
				お主らが 居る ではないか。 一騎 当千の 兵どもが のう。
				ちちうえ 父上、 兄者、 まだ 一つ 手 だて がありました。
				きなた 真田の 十勇士よ、 目指すは ただ 一つ、 家康の 首 じゃー。
前面 F・O			全	おう 一つ。
下手 F・I				(家康の 馬印が 倒される)
			徳川家康	ええ ーい、 幸村 めが。
				あ奴に この 首 捕られる くらい なら、 ここで 切腹 して
下手 F・O				果て ようぞ。
前面 F・I			M㊸	C・I して B・G
			全	(戦の 立ち 回り)
			声	徳川の 援軍が 参りました ぞー。 それも 夥しい 数で ござる。
前面 F・O			真田幸村	真田は 負け 戦は 致さぬ。 これまで じゃ。
中高 F・O				皆の 者、 妻や 子の 待つ 家に 帰れる よう、 命を 惜しめ よ。
			殺陣	(弱り 果てた 仲間を 介抱 する 幸村に、 越前 松平 隊の
				西尾 仁左衛門が 槍で 襲い 掛かる)
夕景			真田幸村	夕陽 じゃ、 大坂 城が 赤々と 照り 映えて おる。
				信濃の 山々が、 見える ぞ。
	SE たたら			真田の 里の たたら 場の 竈に、 赤々と 火が 燃え、
				鉄を 打つ 音が 聞こえる。
				紅葉の 散り 敷く 山道で、 兄者と 遊んだ なあ。

				お母上も父上も…。散るぞ、ひらひらと、
				あの紅葉は朱に染まって死にゆく私の野辺送りだったか…。
中高 F・O				(首を切られ絶命する。)
		文字		真田幸村 戦死 享年47歳
下高 F・I		西尾仁 左衛門		(首を家康に届ける)
			M	F・O
		徳川 家康		何、幸村の首を執ったとな。あ奴が生きておれば、
				この家康、あわや自害に追い込まれて居ったわ。
				上田合戦で一度ならず二度までも煮え湯を飲まされ、
				征夷大將軍のこのわしを、此度の戦で
				三度、追い詰めたは世にあ奴只一人。
				さすが、日の本一の兵よ、真田幸村と言う男、はっはっは…。
下高 F・O				皆の者、幸村の武勇にあやかるがよい。(首をかざして)
			M	B・G
中央 F・I		大坂 城		(炎上)
上高 F・I		千姫		(高台から悲しげに見守り、泣き崩れる)
上高 F・O		淀殿 秀頼		(自害)
		大助		(自害)
				フィ ナレ わらべうた
変化		十勇 士		(炎の中から秀頼を導き、歩き出す。)
前面 F・I				われ、真田十勇士。
				働き場所と死に場所は心得てござる。
				それは、御大将、真田幸村様のもと。
		真田 幸村		(中央に立つ)
		真田 大助		(父の傍らに立つ)
			M	F・O
		十勇 士		皆様の心に、記憶の中に、幸村様生きる限り

				われ 我らの旅はまだ続く。
	下高 F・I		歌声	花のようなる秀頼さまを 鬼の様な真田が連れて 退きも退いたり 鹿児島へ 退きも退いたり 鹿児島へ
			M㊟	同じ旋律が変奏増幅されB・Gで流れ
		映像		(薩摩の秀頼墓所 映る)
		文字	N	幸村の兄、信濃松代藩初代藩主 真田信之 死す。享年93歳
		文字		大いなる力に挑み、世を切り開く不屈の精神は、その後も 近代国家建設の大槌の音高く響かせ、 350年の時を超えて、信濃の大地に受け継がれてゆく。 松代藩家老 恩田木工、新劇女優 松井須磨子 作曲家 海沼実、草川信 そして 松代藩儒学者 佐久間象山へと…。
	全面 F・I		M㊟	イントロ入って
		合唱		生きるのは 戦うのは 何故に 愛とは 信義とは 何処に 君も探しているのか 歩むべき道を ならば 共に進み行こう (別パートが下の歌詞に被って歌う 生きる 戦う 愛 信義) この戦国の世に 咲く花が 朱の血潮に 染められようと 進み行こう 共に 進み行こう 共に アーアーアー
緩帳↓	全面 F・0		M	高鳴り…
緩帳↑	全面 F・I			カーテンコール
緩帳↓	全面 F・0			完

連絡先

メール misaki-ran@mth.biglobe.ne.jp

電話 0263-47-8005

参考文献

- 実伝 真田幸村 火坂雅志/著 角川文庫/刊
- 新装版 真田幸村 江宮隆之/著 学研文庫/刊
- 真田幸村 伝説になった英雄の実像 山村竜也/著 PHP新書/刊
- 疾風六文銭 真田三代と信州上田 週刊上田新聞社/編
- 歴史の達人 街道と歴史遍路 株式会社英和出版社/刊
- 改定新版 武田信玄 世界文化社/刊
- 金属と地名 谷川健一 三一書房
- 異聞真田幸村 中田耕治 東都書房
- 歴史街道 真田幸村 PHP研究所
- 日本の地名 筒井功 河出書房新社
- 闘将真田幸村と真田一族 新人物往来社 別冊歴史読本
- 真田十勇士 株式会社英和出版社
- 真田一族外伝 田中博文 産学社
- 戦国人物伝 真田幸村 ポプラ社
- 徳川四天王 株式会社英和出版社
- 真田三代 上 下 NHK出版 火坂雅志
- 真田氏資料集 上田市立博物館
- 歴史の中で語られてこなかったこと 網野善彦 宮田登 洋泉社
- 真田幸村 真田十勇士 柴田錬三郎 文春文庫
- 新装版真田幸村 真田十勇士 柴田錬三郎 文春文庫
- 真田三代 平山優 PHP新書
- 新説 真田三代ミステリー 山田順子 実業の日本社
- 刀鍛冶の生活 福永酔剣 生活史叢書 雄山閣出版
- 秀吉と大坂城 大坂城天守閣特別事業委員会/編

歴史街道 真田三代 学研出版社

池波正太郎真田太平記館図録 池波正太郎真田太平記館

秀吉と真田 抄録版 上田市立博物館

歴史探訪 闘将真田幸村 株式会社普遊舎

この一冊で日本の歴史がわかる！ 小和田哲男／著 三笠書房／刊

信濃の古典 長野県国語国文学会編 信濃毎日新聞社／刊

角川第二版 日本史辞典 高柳光寿、竹内理三／編 角川書店

国家の徳 曾野綾子 産経新聞社

最新年表信濃の歩み 児玉幸多 信濃毎日新聞社

神の川流れし我が郷真田 宮島武義

スタッフ

担当	氏名
脚本・演出	美咲 蘭
助演出	岩波美佐穂
助演出	東 洋子
音楽監督・作編曲	角田忠雄
舞台監督	レザンホール
照明	(株)長野舞台
音響	(株)長野舞台
映像	オフィス蘭
映写	(株)長野舞台
舞台転換	清野貴史
衣装	オフィス蘭
衣装縫製	栗田恒子
衣装縫製	丸山ふき子
衣装縫製	大濱マリ
和装着付け	美保姿きもの総合学院
衣装借用	(株)井筒企画
衣装着付け	(株)井筒企画
結髪	小原典子
結髪	古林美幸
メイクアップ	左右田奈々
床山	文柳かつら
練習スチール	大垣孝夫
本番スチール	百田達哉
DVD・BD	アビレック
演奏	アンサンブル・セバスチャン
殺陣	上野隆三
監修	小松芳郎

キャスト

景 役柄 氏名

第一景 十勇士見参

京童1	飯澤奈々
京童2	床尾有里紗
京童3	増田萌香菜
京童4	増田江彩里
京童5	草間恵美
京童6	進藤万梨乃

海野六郎	秋山泰則
三好伊佐入道	本澤正子
三好清海入道	田井克幸
望月六郎	司 裕介
祢津甚八	江原政一
穴山小助	野々村仁
由利鎌之助	太田雅之
霧隠れ才蔵	白井滋郎
猿飛佐助	奥深山新
箕 重蔵	早出隼人

真田信繁	成田俊郎
巷の女1	赤沼志保
巷の女2	大久保直子
巷の女3	菅沢真理
巷の女4	田中資子
巷の女5	築野文子
巷の女6	野崎桃加
巷の女7	丸山由紀子

織田信長	大垣孝夫
真田昌幸	岡村哲男
通行人	飯島美代子
	島 宜子
	田中洋子
	古畑ちとせ
	丸山ふき子
	野崎華加
	東 洋子

第二景 真田の里のたたら場

真田昌幸	岡村哲男
妻・山の手殿	美咲 蘭
侍女・千鳥	林 慶子
真田源三郎(信之の幼名)	飯澤奈々
真田弁丸(信繁の幼名)	床尾有里紗

里の童 紅葉	増田江彩里
里の童 水樹	進藤万梨乃
里の童 葦菜	草間恵美
郷の童 里和	増田萌香菜

三好清海入道	田井克幸
三好伊佐入道	本澤正子
霧隠れ才蔵	白井滋郎
穴山小助	野々村仁
海野六郎	秋山泰則

真田の里の鍛冶師1	島津則雄
真田の里の鍛冶師2	東 洋子
真田の里の鍛冶師3	築野文子
真田の里の鍛冶師4	丸山ふき子
真田の里の鍛冶師5	百瀬芳久

たたらを踏む女1	赤沼志保
----------	------

たたらを踏む女2	飯島美代子
たたらを踏む女3	今村久美子
たたらを踏む女4	大久保直子
たたらを踏む女5	丸山由紀子
たたらを踏む女6	古畑ちとせ

人工頭(にんくがしら)	米山隆将
-------------	------

砂鉄を拾う女1	栗田恒子
砂鉄を拾う女2	菅沢真理
砂鉄を拾う女3	田中洋子
砂鉄を拾う女4	野崎桃加

舞踊	演技者
合唱	信濃の国合唱団

第三景 人質・越後と大坂

直江兼続	塩澤 明
妻・お船	野崎華加
侍女・布由	島 宜子
真田信繁	成田俊郎

豊臣秀吉	大矢敬典
石田三成	島津則雄
大谷吉嗣	高橋幸夫
真田信繁	成田俊郎
侍女・皐月	古畑ちとせ

第四景 下野犬伏の別れ

豊臣秀吉	大矢敬典
妻・ねね	築野文子
淀殿	美咲 蘭
秀頼	増田萌香菜
霧隠れ才蔵	白井滋郎

石田三成	島津則雄
望月六郎	司 裕介
真田昌幸	岡村哲男
真田信幸	大垣孝夫
真田信繁	成田俊郎

祢津甚八	江原政一
くノ一狭霧	赤沼志保
くノ一夕月	丸山由紀子
前田利家	犬飼敏一
宇喜多秀家	高木太門
毛利輝元	寺嶋 清
徳川家康	百瀬芳久
幸若舞の踊り手1	草間恵美
幸若舞の踊り手2	菅沢真理
幸若舞の踊り手3	田中資子
幸若舞の踊り手4	島 宜子
幸若舞の踊り手5	大久保直子
幸若舞の踊り手6	野崎華加
幸若舞の踊り手8	田中洋子
幸若舞の踊り手9	林 慶子

合唱	信濃の国合唱団
舞踊	演技者

第五景 沼田城の小松姫

真田信繁	成田俊郎
真田昌幸	岡村哲男
信之の妻・小松姫	東 洋子
信之の娘・まん	増田江彩里
侍女・初音	栗田恒子
侍女・萌黄	古畑ちとせ

第六景 上田合戦

真田信繁	成田俊郎
真田信幸	大垣孝夫
真田昌幸	岡村哲男
真田大助	進藤万梨乃

徳川秀忠	米山隆将
------	------

由利鎌之助	太田雅之
穴山小助	野々村仁
三好伊佐入道	本澤正子
三好清海入道	田井克幸
真田信幸	大垣孝夫
真田昌幸	岡村哲男
笥 十蔵	早出隼人
海野六郎	秋山泰則
くノ一麻友由	野崎華加
くノ一蚕	草間恵美

百姓与次郎	高橋幸夫
石田三成	島津則雄

徳川家康	百瀬芳久
本田忠勝	塩澤 明
信繁の妻・安芸姫	野崎桃加
娘・お梅	床尾有里紗
娘・菖蒲	増田江彩里
役人1	米山隆将
役人2	大矢敬典

第七景 流人・九度山村の日々

里人1	赤沼志保
里人2	草間恵美
里人3	島 宜子
里人4	高橋幸夫
里人5	野崎華加

里人6	林 慶子
里人7	古畑ちとせ
里人8	丸山由紀子
里人9	今村久美子
百姓仙蔵	早出隼人
妻・志津	本澤正子
村長・清左衛門	秋山泰則
妻・早蕨	丸山ふき子
真田昌幸	岡村哲男
真田信繁	成田俊郎
妻・安芸姫	野崎桃加
娘・お梅	床尾有里紗
娘・菖蒲	増田江彩里
嫡男・大介	進藤万梨乃
里の娘ゆず	増田萌香菜
徳川方役人1	米山隆将
徳川方役人1	大矢敬典
小松姫	東 洋子
真田信幸	大垣孝夫
徳川家臣1	犬飼敏一
徳川家臣1	高木太門
百姓与志	築野文子
百姓お萱	飯島美代子
百姓お佐和	田中資子
望月六郎	司 裕介
海野六郎	秋山泰則
穴山小助	野々村仁
由利鎌之助	太田雅之
祢津甚八	江原政一
三好伊佐入道	本澤正子
三好清海入道	田井克幸
笥 十蔵	早出隼人

霧隠れ才蔵	白井滋郎
猿飛佐助	奥深山新
徳川家康	百瀬芳久
合唱	信濃の国合唱団

第八景 大坂城出丸造営

人夫1	赤沼志保
人夫2	東 洋子
人夫3	草間恵美
人夫4	栗田恒子
人夫5	島 宜子
人夫6	高橋幸夫
人夫7	築野文子
人夫8	野崎華加
人夫9	林 慶子
人夫10	古畑ちとせ
人夫11	丸山ふき子
人夫12	丸山由紀子
望月六郎	司 裕介
海野六郎	秋山泰則
穴山小助	野々村仁
由利鎌之助	太田雅之
祢津甚八	江原政一
三好伊佐入道	本澤正子
三好清海入道	田井克幸
篁 十蔵	早出隼人
霧隠れ才蔵	白井滋郎
猿飛佐助	奥深山新
真田信繁	成田俊郎
声1・4	美咲 蘭
声2	犬飼敏一
声3・5	大垣孝夫
後藤又兵衛	島津則雄
くノ一紅葉	菅沢真理

くノ一水樹	田中洋子
くノ一葦菜	大久保直子

第九景 大坂冬の陣

淀殿	美咲 蘭
豊臣秀頼	進藤万梨乃
妻・千姫	飯澤奈々
真田信繁	成田俊郎
侍女・楓	栗田恒子
侍女・萩野	今村久美子
侍女・寿々菜	飯島美代子
侍女・撫子	田中資子
徳川家康	百瀬芳久

第十景 大坂夏の陣

徳川家康	百瀬芳久
淀殿	美咲 蘭
豊臣秀頼	進藤万梨乃
真田信繁	成田俊郎
侍女・楓	栗田恒子
法螺貝吹き	高木太門

第十一景 戦国散華

真田幸村	成田俊郎
猿飛佐助	奥深山新
くノ一紅葉	菅沢真理
くノ一水樹	田中洋子
くノ一葦菜	大久保直子
淀殿	美咲 蘭
豊臣秀頼	進藤万梨乃
妻・千姫	飯澤奈々
侍女・寿々菜	飯島美代子

侍女・萩野	今村久美子
侍女・撫子	田中資子
侍女・楓	栗田恒子
老中1	犬飼敏一
老中2	米山隆将
望月六郎/徳川方武将	司 裕介
海野六郎	秋山泰則
穴山小助/徳川方武将	野々村仁
由利鎌之助/徳川方武将	太田雅之
祢津甚八/徳川方武将	江原政一
三好伊佐入道/赤備え	本澤正子
三好清海入道/徳川方武	田井克幸
笥 十蔵	早出隼人
霧隠れ才蔵	白井滋郎
猿飛佐助	奥深山新
西尾仁左衛門	米山隆将
徳川家康	百瀬芳久
合唱	信濃の国合唱団
真田赤備え隊1	丸山由紀子
真田赤備え隊2	古畑ちとせ
真田赤備え隊3	丸山ふき子
真田赤備え隊4	林 慶子
真田赤備え隊5	野崎華加
真田赤備え隊6	築野文子
真田赤備え隊7	高木太門
真田赤備え隊8	高橋幸夫
真田赤備え隊9	島 宜子
真田赤備え隊10	塩澤 明
真田赤備え隊11	赤沼志保
真田赤備え隊12	草間恵美
真田赤備え隊13	岡村哲男
真田赤備え隊14	東洋子

真田赤備え隊15

島津則雄

フィナーレ

合唱

信濃の国合唱団

登場人物

全員

スタッフ

全員

取材地

長野県上田市

上田市立博物館
池波正太郎真田太平記館
信濃国分寺跡史跡公園
信濃国分寺資料館

上田城跡
安智羅大明神
日向畑
上田原合戦古戦場
板垣神社
板垣信方の墓
生島足島神社
真田神社

上田市真田町

真田氏発祥の地
砥石米山城址
延喜式内山家神社
真田町夢工房
観音堂
穴沢弾正塚野一本松
出早雄神社
瀧宮神社
男石神社
砥石山陽泰寺
金縄山実相院
戸沢のねじ行事
長の石垣
松尾城
角間溪谷
真田氏屋敷跡

真田氏歴史館

海野宿

真田山種月院長谷寺

太柏山信綱の墓

真田氏本城

長野市松代

長国_ニ信繁靈屋

海津_ヲ(松代城)

松代文武学校

真田宝物館

山梨県 武田信玄の取材地と同じ

松本市

林城址

平瀬城址

栃木県佐野市

犬伏 新町薬師堂

小山評定跡

群馬県市

沼田城蹟

長野県東筑摩郡麻績村

聖湖

大阪市

大阪市立歴史博物館

大坂城

荒砥城

三光神社

安居神社

和歌山県九度山町

真田庵

隧道

取材協力（敬称略）

高野忠房 宮島武義